

meiji



1 9 1 6 — 2 0 2 6

ビジュアルで振り返る110年



明治グループ110周年記念ロゴへの想い

記念ロゴの「!!」は明治グループから生まれる新たなアイデアを、また「♡」はステークホルダーの皆さまからの共感を通じ、持続的な社会への貢献を表現しました。110周年を未来への出発点とし、「アイデアを広げ共感の輪を広げよう」というメッセージを込めています。

1 9 1 6 – 2 0 2 6

ビジュアルで振り返る110年

CONTENTS

明治グループ110年の礎	3
1916-49	5
1950-59	11
1960-69	13
1970-79	15
1980-89	17
1990-99	19
海外展開の軌跡 1 — 1970-99	23
2000-09	25
2010-19	29
海外展開の軌跡 2 — 2000-19	33
2020-26	37
海外展開の軌跡 3 — 2020-26	41
海外展開の軌跡 4 — New Global Action — 新たなアプローチで、グローバルにチャレンジした10年 —	43
トップメッセージ	45
明治グループ理念体系	46
国内事業所・グループ会社一覧	47
海外事業所・グループ会社一覧	49

凡 例

◎可能な限り発売当時の写真を掲載しておりますが、そうでない場合は写真下に注釈を入れています。

◎各製品の説明文は、出来るだけ発売時の表現を使用するようにしています。

◎医療用医薬品については、関連法規に則り、製品写真未掲載としております。

◎工場、研究所、研修所の記載については、以下のルールに基づいて記載しています。

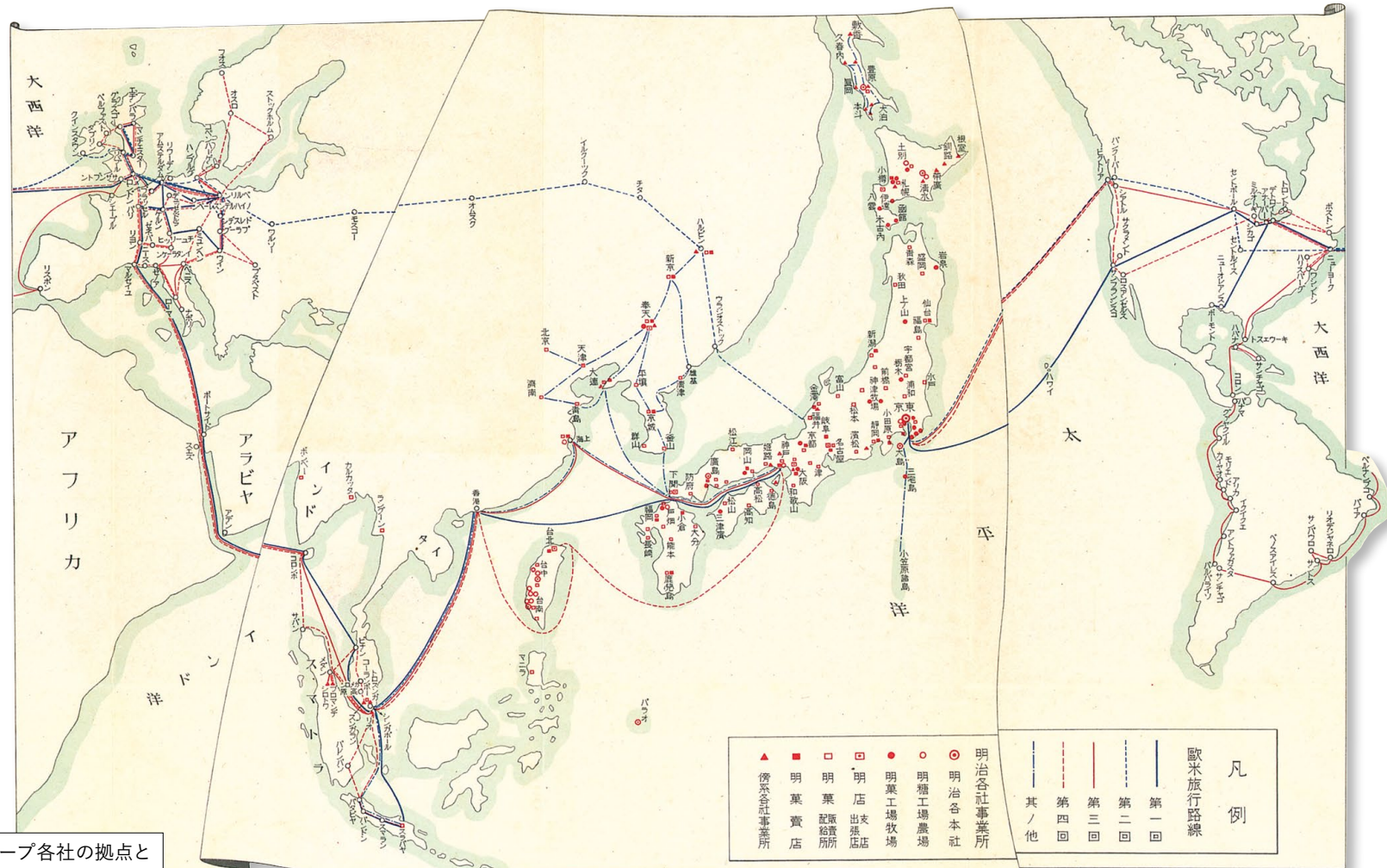
工場名、研究所名、研修所名（現工場名、研究所名、研修所名：乳／菓／薬／栄養・開始年・所在都道府県名*）

*工場名、研究所名、研修所名で所在地がわかりにくい場合は、「都道府県名 地名」としています。

◎海外展開の軌跡①、②、③については、対象期間内に設立された事業会社・グループ会社について記載しています。

対象期間：海外展開の軌跡①（1970-1999）、海外展開の軌跡②（2000-2019）、海外展開の軌跡③（2020-2026）

明治グループ 110年の礎



明治グループ各社の拠点と
相馬半治の視察旅行ルート
出典:「還暦小記」相馬半治

製菓、乳業の事業がスタート
1916「東京菓子」設立
1917「極東煉乳」設立



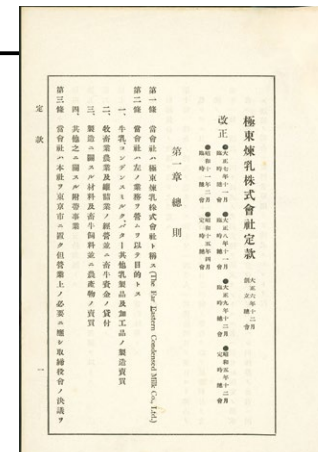
東京菓子



極東煉乳



東京菓子株式会社定款 (原本)



極東煉乳株式会社定款 (複写)

明治ブランドを全国へ！
1920「明治商店」設立

グループの商品を取り扱う総代理店として株式会社明治商店を設立。菓子や乳製品などの販売を全国で展開したほか、後に京橋や丸ビルの売店の経営も委託された。その後、薬品を含め販促活動も行った。1942年、明治商事株式会社に変更。



明治商店東京本店

さらなる飛躍を期して
1924「明治製菓」に変更
1940「明治乳業」に変更

東京菓子は明治製菓株式会社に、極東煉乳は明治乳業株式会社に變更。



明治製菓



明治乳業

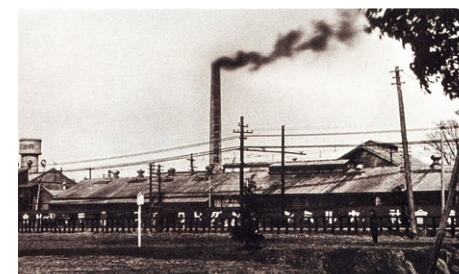
二人三脚で事業基盤を作り上げた
相馬半治(左)と有嶋健助(右)

明治グループは、製糖事業をそのルーツとしている。創業者の1人である相馬半治は明治製糖を設立し、日本や台湾を舞台に広く製糖事業を展開。科学技術を駆使した多角的経営を進める中、有嶋健助とともに国家社会への貢献、食品文化への寄与、栄養報国を志し、製菓業、乳業に参入した。さらにその後、食品事業、薬品事業へも進出していった。

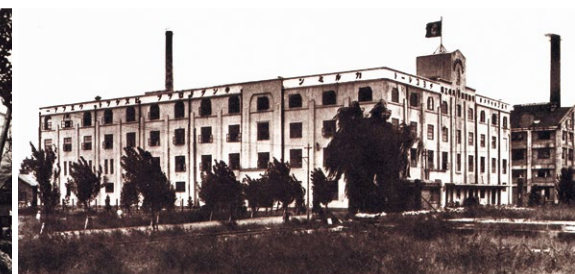


キャラメル、チョコレート、アイスクリーム……
大規模な最新工場で需要に応える

近代設備を整えた大久保工場、川崎工場では、キャラメル、チョコレート、ビスケットなどを製造。ドイツや米国から技師を招き、製造技術の向上も図った。両国工場では、夏季にアイスクリーム、冬季にはケーキやあんパンなどを製造した。



大久保工場 (菓・1917・東京)



川崎工場 (菓・1925・神奈川)



両国工場 (乳・1927・東京)

大正デモクラシーとともに、今に続く大衆文化が花開き、おいしい楽しい菓子が子どもたちの心をつかみ、牛乳・乳製品が日本の食卓を彩ります。甚大な被害をもたらした関東大震災、昭和を迎え戦争の時代へと突き進んでいきました。そして焼け跡から、新たな希望とともに復興への歩みを始めます。

1921

カルシウム入り清涼錠菓「カルミン」

ロングセラーとなった商品の第1号。



1922

売店をオープン

1922年、第一相互ビルに京橋売店を開設。店頭での陳列効果により販売を促進。小売店向けのサービスとして、歌舞伎座での観劇会などを実施した。



京橋売店

1923

お菓子文化を発信するPR誌『スイート』発刊



欧米での視察体験から、相馬半治は、広告の重要性を認識しており、活発な宣伝活動を展開していた。その一環として1923年に発刊されたのが季刊誌『スイート』。当時はまだ珍しい企業PR誌だったが、商品の紹介だけでなく、当時活躍していた文化人の作品を掲載するという編集方針が斬新だった。寄稿者の中には川端康成、菊池寛、芥川龍之介、島崎藤村、小川未明などといった著名な作家や画家の名前も。大正時代のモダン文化を反映した画期的な雑誌であった。

1921

戦前の日本を代表する練乳商品「明治メリーミルク」

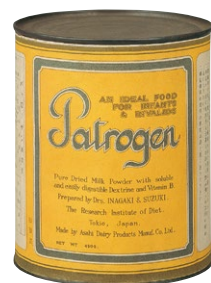
電車内広告など積極的な宣伝活動を展開。ビタミンB₁を発見した鈴木梅太郎博士からは「外国製品にも劣らない」とのお墨付きも。



1923

育児用粉ミルクのルーツ「パトローゲン」誕生

ビタミンB₁（オリザニン）を日本で初めて添加。鈴木梅太郎博士が指導した糧食研究会で開発された。



1924

アイスクリーム事業を本格スタート

京橋の仮工場からスタート。その後、本所区亀沢町（現・墨田区緑）に両国工場を新設。百貨店などの高級店で販売された。



1926

“チョコレートは明治”の原点「ミルクチョコレート」誕生

関東大震災後の新たな風俗文化の波に乗り、チョコレート人気上昇。需要増に伴って新工場（川崎）の建設を進め、量産体制が整い、1926年9月に「ミルクチョコレート」を20銭で発売。



1927

子どもたちに大人気のキャラメル

「サイコロキャラメル」（1927）と当時流行した正ちゃん帽を被った男の子の意匠の「ミルクキャラメル」（1929）が子どもたちに親しまれた。



お菓子の進物が大人気

贈り物としても重宝された明治のお菓子。全国35店舗の売店でチョコレート、キャンデー、ドロップなど、バラエティ豊かな詰め合わせが販売された。



1926

ホッとするひとときを食品事業のスタート「明治ココア」発売

当時の事業多角化の柱の一つである食品事業は、ココアの製造から第一歩を踏み出した。



1928

両国工場で「明治牛乳」誕生

両国工場のミルクプラントで生乳を処理して販売開始。発売当初わずか7店だった「明治牛乳」販売店は、1年後に35店、2年後には54店と順調に増えていった。



初期の「明治牛乳」



三菱仲5号館

1912年3月、三菱が丸の内仲通りのオフィス街の一角に建てたもの。鉄筋コンクリート3階建てで、赤レンガ造りの西洋風の外装が印象的。竣工と同時に明治製糖が東京事務所として借り受けた。また、1928年から1933年までの5年間は、東京菓子・明治製菓の本社事務所も置かれていた。左奥に見える建物は、2019年に建て替えられた東京會館。

1931

自動販売機を設置

キャラメルやチョコレートを販売した自動販売機。

1935

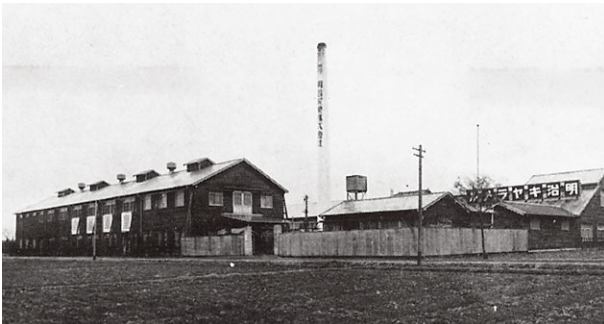
生乳を工場へ運ぶ 日本初の牛乳タンクカー

勝山工場と両国工場間で運行開始。タンクローリーを当時は牛乳タンクカーと呼んだ。



売上好調の菓子、 缶詰の増産に対応

工場を次々と建設して生産体制を拡充。1936年、函館工場が発足、戸畑工場が開設され、ビスケット、キャラメルなどを量産。1939年、輸出特別保税用の神戸工場も開設。多様な缶詰も1936年に開設した藤枝工場をはじめ、勝山工場、笠岡工場、上山工場ほかで生産を開始し、1940年までに10工場で生産した。



藤枝工場（現 東海工場：菓・1936・静岡）



函館工場（菓・1936・北海道）



戸畑工場（菓・1936・福岡）

1932

牧場からの豊富な生乳で 「明治バター」や 「明治チーズ」を本格生産

両国工場では、バターの本格生産を開始。また、スイスよりチーズの製造機械を導入し、勝山工場のチーズを原料に、いち早くプロセスチーズの工業生産をスタートさせた。



優秀な種雄牛が生産拡大に貢献

極東農場や根室牧場の優秀な種雄牛は、ホルスタイン種の乳牛の世界的記録牛を多く産出した。

ぼくの名前はメージ・デモンストレーター



新鮮な生乳を供給

根室牧場をはじめ多くの牧場を経営。生乳生産の安定化や基礎種牛の育成供給事業を通して、日本の乳牛の改良にも貢献した。



極東農場（乳・1918・北海道 石狩）



根室牧場（乳・1939・北海道）



特別牛乳牧場
（乳・1937・東京 北多摩郡）

牛乳、乳製品の工場を各地に展開！ 国内における事業基盤を確立

北海道での事業基盤を確立するなど、各地で精力的に乳業を推進。東京、千葉、大阪などで牛乳やアイスクリームを製造し、1940年前後には、ほぼ全国展開を達成した。



清水工場（乳・1929・北海道）



主基工場（乳・1920・千葉）

世界に広がる販売先

大正時代より販売経路を開拓し、総合商社等を通じて行った輸出も好調。チョコレートやキャラメル、ビスケット、キャンデー、練乳等の販売は、中国・インド・東南アジアをはじめ、アフリカにまで及んだ。



韓国の販売店



インドでの宣伝活動



シンガポールでの商品広告



チョコレート宣伝隊



中国の工場



輸出用カタログと
輸出用練乳缶



明治製菓ビルデング

1933年4月に竣工した、鉄筋コンクリート6階建て、地下1階のビル。明治製糖の所有地だった東京府京橋区（現・中央区）京橋2丁目に建築された。開館と同時に明治製菓、明治商店などの事務所が入居。1階には明治製菓販売所、2階には実験室などを備え、地下には社員食堂も設けられた。東京大空襲でも被災を免れ、2001年に建て替えが決定するまで、長きにわたって社員に親しまれ続けた。



1936
缶詰の製造と輸出を開始
缶詰の第1号は1936年製造の「びわの缶詰」。続いて桃、みかん、パイナップル、アスパラガスを製造。みかんとアスパラガスは英国とタイに向けて輸出した。



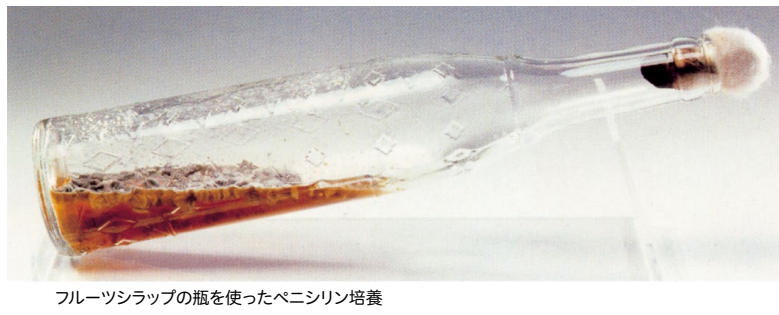
1947
戦後の子どもの栄養補給を助ける商品を提供
戦後の乳児食糧対策として、輸入脱脂粉乳などを原料にして育児食が製造された。山形県上山と愛媛県松山の2工場を皮切りに、全国18工場で製造を開始。復興期の家庭を支えた。



1945
「痘そうワクチン」
太平洋戦争終戦後に衛生環境が悪化し、痘そう（天然痘）の患者が増加。流行を抑制するために開発された第1号となるワクチン。

製菓、乳業ともにペニシリンの製造に注力。
“抗生物質の明治”へ
戦後の1946年、ペニシリンの製造に着手。瓶を使用した表面培養から始め、その後、培養方法を変更。他社に先駆けて大容量タンクを設置するなど、積極的な設備投資を敢行し、ペニシリン市場での存在感を高めていった。なお、製菓、乳業のペニシリン事業は1958年に統合された。

慰問用や非常時用など、戦時中もさまざまな商品を出荷
戦時体制下、砂糖、小麦粉、生乳、缶の入手が年々困難になり、菓子類は携行食料や軍・官納品に、缶詰類は統制下の貯蔵食料用に、乳製品類は配給統制となった。



1945
食品事業が復興の糸口
鴨宮工場（1948年に小田原工場に改称）では漬物を製造。そして北海道に松前工場（水産加工品）、広島県に大野製塩場、滋賀県に八日市工場（ジャム・佃煮等）を開設した。

1945
東京大空襲で瓦礫の山と化した京橋付近
川崎工場・神戸工場・本所工場などが被災。苦難の中、終戦の日を迎えた。



1950-59

「奇跡」といわれた戦後の復興。日本の経済は瞬く間に元気を取り戻し、ベビーブームの到来とともに街はにぎわいます。テレビ放送が開始され、街頭で、お茶の間で、老若男女釘付けになりました。少年漫画週刊誌も創刊。みんなが、「巨人・大鵬・卵焼き」でした。



1951

牛乳のたんぱく質を消化しやすい 「ソフトカード 明治コナミルク」

日本で初めて、たんぱく質をソフトカード化した粉ミルク。この改良によって、たんぱく質が赤ちゃんの胃の中で消化されやすくなった。

1950

結核治療薬 「ストレプトマイシン硫酸塩」

1950年頃、政府は死因の1位であった結核の感染対策のため、抗生物質ストレプトマイシンの買い上げを実施。買い上げ量の半分以上を明治製品が占めた。

1951

戦後のお菓子づくりが再スタート

昔のままのなつかしい「ミルクチョコレート」が復活。戦後初の本格的国産チョコレートとして発売された。



復活したミルクチョコレートのポスター



1950

わが国で初めての 工業的生産によるヨーグルト 「明治ハネーヨーグルト」

蜂蜜と乳酸菌入りの本格的なヨーグルトとして一般家庭にヨーグルトを普及させた先駆的商品。

1952 「バタービスケット」

1954 「ソーダクラッカー」

1952年、小麦粉の統制が解除。その後、英国から最新設備を導入した大阪工場を開設し、1955年からビスケット、クラッカーの量産をスタート。



バタービスケット



ソーダクラッカー

1955

最初は三角形だった 紙容器入り明治牛乳

牛乳の容器として紙パックが使われるようになった。三角形の容器は軽くて丈夫な構造で、輸送にも適していた。



1951

日本初の流動食 「レストーゲン」

手術後の栄養改善のために開発された日本初の流動食。その後の流動食事業の基礎をつくった。1951年ごろに久米川工場で製造を開始した。



1955

Meiji から Meiji へ

「コーヒーキャラメル」で ロゴデザインを一新

後に東京オリンピック（1964）の公式ポスターを制作する亀倉雄策氏が「Meiji」の新たなロゴをデザイン。1957年発売の「ミルクチョコレートデラックス」のパッケージも亀倉氏が手がけた。



1957

楽しさ おいしさ 栄養いっぱい 「明治チーズベビーサイズ」

おやつに、お酒のつまみに。手軽においしく食べられるベビーサイズの明治チーズ。



1958

抗生物質 「カナマイシン硫酸塩」

梅澤濱夫博士が発見した抗生物質カナマイシン。早くから博士の研究に協力してきた明治製菓が臨床試験等を支援し、製品化した。結核をはじめ広範な病原菌への有効性が国際的にも評価され、1966年には日本の輸出薬品のトップに。

1959

予告CMが斬新だった 「JPチョコレート」

シェルチョコレートの中にパイナップル、オレンジなどのクリームを詰めた大人気商品。「JP」とは、デンマーク製の最新鋭設備であるヤンセン・プラント（Jaensen Plant）の頭文字であるが、日本の草分け（Japan Pioneer）の自負も込められている。



工場設備が近代化し、技術も進化！



烏山工場（乳・1952・東京）



大阪工場（菓・1955・大阪 高槻）



淀川工場（菓・1958・大阪）

乳製品や牛乳の需要拡大に対応すべく、烏山工場（1963年東京工場に改称）が操業開始。日本初のHTST（高温短時間殺菌法）方式を導入した工場として注目を集めた。大阪工場は、菓子第2の主幹工場、川崎工場被災のリスク分散、近代的オートメーション設備、見せる工場として開設。大阪では、薬品製剤生産拠点として、淀川工場も発足した。1950年代操業開始で現在も稼働している工場は、大阪工場、戸田橋工場（現戸田工場：乳・1954・埼玉）の2カ所。そのほか16カ所の工場が操業を開始していた。

1960-69

ダッコちゃんブームとともに60年代がスタート。高度経済成長が加速する中で東京オリンピックが開催され、日本は世界中の目を集める華やかな舞台となったのです。科学技術の発展とともに宇宙船の開発も目覚ましく、アポロ11号が月面着陸を果たしました。

トリオを組んでチョコレート時代をリード

1957 「ミルクチョコレート
デラックス」
1961 「ブラック」
1962 「ハイミルク」



チョコレートを薄型から厚型にし、黄色の明るい目新しいパッケージで従来のチョコレートのイメージを打ち破った「ミルクチョコレートデラックス」。「ブラック」「ハイミルク」とともにトリオと呼ばれた。

1962

瓶入り炭酸飲料
「明治スカット」

日本人好みの清涼飲料として業界の注目を集めた。その後種類を増やし、牛乳販売店の宅配ルートによる家庭販売を開始した。



1965

生きた乳酸菌とビタミンC
「明治活性パイゲンC」

ビタミンCを強化し、くだものの味と香りをミックスした乳酸菌飲料。ふたの裏に「ラッキーちゃん」のあたりマークが出たら、その場でもう1本もらえた。



1967

「チョコバー」

当時、米国ではチョコ菓子の主流でありながら、日本では未開拓だった「チョコバー」を他社に先駆けて商品化。



1961

カラフルで楽しい
「マーブルチョコレート」

七色の糖衣がけチョコレート。筒状のパッケージも斬新。マーブルは、英語で「大理石」「おはじき」という意味。アトムシールで人気にさらに火がついた。



1962

ナッツの食感が新しい
「アーモンドチョコレート」

それまでにないボール形の形状、大きなアーモンド粒を丸ごとチョコレートで包んだボリューム感、スライドして開ける「スリープ箱」のパッケージなどすべてが新しかった。



1965

かわいいミニサイズ
「チョコベビー」

小さくて食べやすい円筒形のチョコに人気集中。好きなだけ食べられるワンタッチオープン容器はにぎり心地も大好評。



1966

簡単便利なホイップクリーム
「明治クレミーホイップ」

牛乳に混ぜてホイップするだけで家庭でも手軽にできるホイップクリーム。



1967

高級路線を切り開く第一弾
「ストロベリークリーム」

板チョコの中に本物のイチゴが入ったクリームを封じ込め、新鮮なイチゴの香りとさらっとした甘さをそのまま生かしたユニークな商品。



1968

離乳食市場に参入
「明治ベビーかゆ」
「明治育児用果汁」

お湯を加えるだけで簡単にできる離乳食の原点「明治ベビーかゆ」などを発売。



1968

チルドで流通
明治のクリーム

「明治コーヒークリーム」「明治フレッシュクリーム」「明治ケーキホイップ」など、種類や容量のラインアップも充実。



1968

それにつけてもおやつは
「カール」♪

お菓子を、ソフトさや軽さが求められるようになる中で開発された“スナック菓子”。まさに、軽くカールした形と、それまでなかった軽い食感が名前の由来。



1969

宇宙船の形がモチーフ
「アポロ」

1969年に人類初の月面着陸に成功した「アポロ11号」。地球に帰還したその司令船をかたどったチョコレート菓子。



菓子や乳業、薬品の 研究拠点などが次々に完成

戦後、急速に消費市場が拡大する中、新製品を生み出す研究開発が大きなテーマに。この時期に、本格的な研究所や研修所が完成した。



中央研究所(薬・1961・神奈川 横浜)



試作研究所(薬・1962・神奈川 川崎)



東村山研修所(乳・1961・東京)



研究所(乳・1963・東京 東村山)

京橋第一ビル

1968年から2001年までの間、ビルの5階から9階に明治乳業の本社が置かれていた。もともと明治乳業の本社機能は明治製菓ビルディングにあったが、1960年代に入って事業が拡大。社員数が終戦直後と比べると、およそ3倍となり、本社が手狭となっていた。そこで1960年4月、本社機能の移転が決定。一時的に近隣の京橋2丁目6番地ビルに移転し、その後この京橋第一ビルに移った。



工場を拡充し、増産・供給体制を整える



神奈川工場(乳・1963・神奈川 茅ヶ崎)



足柄工場(薬・1963・神奈川)

1960年代操業開始で現在も稼働している工場は、神奈川工場のほか、茨城工場(乳・1964・茨城 小美玉)、西春別工場(乳・1968・北海道)。そのほか14カ所の工場が操業を開始していた。

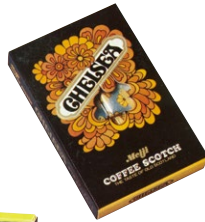
1970-79

「人類の進歩と調和」をスローガンに大阪万博が開催され、日中友好のシンボルであるパンダが来日、上野動物園に長い行列ができました。一方、オイルショックで大きな混乱とともに街の灯が消え、省エネが日本列島に浸透。ベトナム戦争の終結によってアジアは新たな時代を開いていきます。

あなたにも「チェルシー」あげたい
「チェルシー」

- 1971 バタースカッチ
- 1971 ヨーグルトスカッチ
- 1975 コーヒースカッチ

スコットランド伝統のバター味を取り入れた新タイプのキャンデーとして大ヒット。杉浦俊作氏によるファッショナブルなパッケージデザインも話題に。



1972 明治製菓と明治商事が合併

開発から生産、販売までの一貫した体制を確立すべく、明治商事は明治製菓と合併。乳製品部門は明治乳業へ引き継がれた。



1972 「季節性インフルエンザワクチン」

当時のインフルエンザワクチンの有効性や安全性の改善を目的に開発。特に高リスクの高齢者、小児の感染・重症化の予防に現在でも貢献している。

かわいいチョコスナックで新ジャンルを開拓

- 1975 「きのこの山」
- 1979 「たけのこの里」

板チョコが主流の時代に、チョコレートとスナック菓子を組み合わせた“チョコスナック”という新領域を開拓したヒット作。1979年には「たけのこの里」が発売され、日本に本格的なチョコスナックの時代を作り上げていく。



きのこの山



たけのこの里

日本初のプレーンヨーグルト誕生

- 1971 「明治プレーンヨーグルト」
- 1973 「明治ブルガリアヨーグルト」

酸っぱいがコクのある、これまで日本になかった無糖のヨーグルト。1970年の大阪万博で、明治の担当者は本場ブルガリアのヨーグルトを発見した。この出会いが、「明治ブルガリアヨーグルト」の開発につながった。発売当初の容器は、牛乳に使用されているゲーブルパックを採用した。



1972 「おれ、ゴリラ。社長の代理」の名文句が話題を呼んで大ブレイク！

板チョコを買うと、ゴリラのぬいぐるみが当たる。板チョコのキャンペーン「ゴリラプレゼントセール」は、名コピーが受けて大ブレイク。応募総数は350万口に及んだ。



1975 抗生物質 「ジベカシン硫酸塩」

発売後2年で医薬品部門の売り上げの20%を占める中核製品に成長し、海外へも展開した。

1976 明治の冷食第1号 「ピッツァ&ピッツァ」

たっぷりチーズがとろける熱々のピッツァを、家庭でも手軽に。オーブントースターの普及を見越して発売した冷凍ピッツァは、そのおいしさが愛されてロングセラーに成長。



1977 おいしさの新しいかたち 「明治ブリックパック」

紙パックによるワンウェイ化を実現。ファッショナブルで衛生的なハンディタイプのブリックパック飲料。品揃えも豊富。



1979 つけて食べるが新しい 「ヤンヤン」

香ばしいクラッカーにとろけるチョコレートクリームを好きなだけつけて食べるという新しい趣向のお菓子。海外でも人気に。



1976 ケニアの企業へ技術協力！ 「マカダミアナッツチョコレート」

チョコの中身には、栽培技術協力を実施していたアフリカのケニアナッツ社で収穫されたマカダミアナッツを使用。



1979 九州地区限定から全国へ！ 「明治うまか棒」

1979年に九州地区限定で発売されたが、爆発的な人気で翌年には全国展開された。九州で人気のコメディアンのおぼっちゃん氏を起用したテレビCMも話題に。



明治製菓ビル

1976年に明治製菓は創業60周年を迎えた。当時、中央区京橋2丁目には写真の明治製菓ビル、同別館、その北側に京橋2丁目6番地ビルがあり、本社社員が執務していた。また、西側には三菱レイヨンビルがあった。



新しい工場が次々新設された1970年代

写真のほかに、1970年代操業開始で現在も稼働している工場は、稚内工場（乳・1970・北海道）、埼玉工場（乳・1970・埼玉 春日部）、京都工場（乳・1971・京都 京田辺）、本別工場（乳・1972・北海道）。



岐阜工場（菓・1971・岐阜 北方町）



群馬工場（乳・1978・群馬 伊勢崎）



関東工場（現 坂戸工場：菓・1979・埼玉）

1980-89

ルービックキューブ、ファミリーコンピュータが大ヒット。プラザ合意を機に円高が進行し、日本の経済はバブルへと向かい海外旅行者も増えていきました。そして平成が始まり、消費税（3%）が導入。世界に目を向けると、ベルリンの壁が崩壊し、東西冷戦が終結しました。

「明治ブルガリアヨーグルト」のラインアップ拡大

1980 「明治ブルガリアフルーツヨーグルト」（ソフトタイプ）

1981 「明治ブルガリアヨーグルト」（フルオープンタイプ）

1982 「明治ブルガリアドリンクヨーグルト」（3本パック）

「明治ブルガリアヨーグルト」は、1981年にフルオープンタイプの新容器を採用。1984年には、機能面に優れたLB51乳酸菌を加えてリニューアルし、No.1ブランドへ成長。またソフトタイプやドリンクタイプなど、豊富なラインアップを展開した。



グミを日本に根づかせた立役者

1980 「コーラアップ」

1988 「果汁グミ」

日本初のグミキャンデー「コーラアップ」は、“グニグニした噛み心地”で大人気。「果汁グミ」はその名前のとおり、果汁そのもののジューシーな風味が受けた。



1981

抗生物質

**「ホスホマイシン
カルシウム水和物」**

独特の作用で、耐性菌による感染症や腸管感染症などに対して存在価値のある抗生物質。



©テレビ東京

1980

血漿分画製剤

**「完全分子型静注用
人免疫グロブリン製剤」**

重症感染症、自己免疫性の神経疾患、川崎病などに対して適応症を持つ免疫グロブリン製剤。

1980

**みなぎる活力、不屈の精神
「ザバス」ブランド誕生**

これまでの健康食品にはなかった、明るくたくましいイメージの製品をつくろうという思いから生まれたのが、スポーツ栄養食品「ザバス」。アスリートのサポート役として、なくてはならない存在になった。



1982

お茶の間に健康の最新情報を！
「医食同源」放送開始

医学・薬学・栄養学などの最新情報をわかりやすく解説した情報番組。テレビ東京をキー局に日曜の朝、22年間にわたって放送された。



1983

「コーンソフト」ブランド開始

1本のとうもろこしからわずかな量しか取れない希少なコーン油を使用。選りすぐりの素材でおいしさを追求。1990年に明治の「コーンソフト」ブランドとして発売した。



写真は1990年発売時のもの

1983

**東京ディズニーランド®の
オフィシャルスポンサーとして、
開業当時より協賛**

1989

抗不安薬

「ロフラゼプ酸エチル」

フランス・サノフィ社から導入・開発した抗不安薬。長時間続く薬効が大勢の患者を助け、中枢神経系領域で大型薬に成長。

1984

おなかの中の
ビフィズス菌をふやす！
「メイオリゴ」

低カロリーで、虫歯の原因にもなりにくく、ビフィズス菌を増やすのにも役立つ。そんなフラクトオリゴ糖をシロップにし、本格発売。1993年には特定保健用食品としての表示が許可された。



1986

**流動食事業に本格参入
「YH-80」**

ヨーグルトとハチミツにビタミンなどを加えた栄養食品の「YH-80」によって、流動食事業に本格的に進出。

1988

「遺伝子組換えB型肝炎ワクチン」

遺伝子組換え技術を活用して開発された日本初の遺伝子組換えB型肝炎ワクチン。2016年10月から定期接種化された。

研究開発体制の強化

急速に発展を遂げるバイオテクノロジーの実用化研究を進めるべく、ヘルスサイエンス研究所が発足。その後、同敷地内に細胞工学センターを新設した。また、川崎工場内の食料開発研究所と生物科学研究所は、関東工場（現坂戸工場：菓・1979・埼玉）に新たに建設された研究棟に移った。



ヘルスサイエンス研究所（乳・1984・神奈川 小田原）



生物科学研究所、食料開発研究所（菓・1989・埼玉 坂戸）

1990-99

バブル経済の崩壊を皮切りに阪神・淡路大震災、大手企業の破たんなど、「失われた10年」とも呼ばれた時代。インターネット時代の幕開けを象徴するWindows95や、たまごっち、ポケベル、そしてテレビやラジオなどのマスメディアも活気があり、ユニークな10年でもありました。



1993

新たな菌株LB81乳酸菌を採用し
機能面がさらに進化

「明治ブルガリア ヨーグルトLB81」

菌株を整腸作用に優れたLB81乳酸菌へ変更。1996年、プレーンヨーグルトで初めて特定保健用食品としての表示が許可された。

1990

抗生物質

「アルベカシン硫酸塩」

メチシリン耐性黄色ブドウ球菌（MRSA）感染症治療薬として国内で初めて承認された抗生物質。

1991

血漿分画製剤

「生体組織接着剤」

外科手術時に出血部位の止血や組織の接着・閉鎖を目的に使用される生体組織接着剤。

1992

北海道の新鮮な生乳を使い、 日本人の味覚にあった乳製品 「明治北海道十勝」ブランド誕生

1992年に誕生した明治北海道十勝ブランドは、日本人の味覚に合ったチーズを目指して開発。



明治北海道十勝
スライスチーズ



明治北海道十勝
カマンベールチーズ

1992

冬にしか出会えない なめらか口どけチョコ 「メルティーキッス」

それまでのチョコレートにはなかった“雪のような口どけ”を実現。冬期限定発売という当時では珍しい販売方法やCMにより、ヒット商品に。1993年に全国発売。



1994

レトロな銀座の洋食の味を再現 「銀座カレー」

薄切り牛肉と炒め玉ねぎのソースで
古き良き洋食の味を再現。



1995

“おいしさ、栄養、使いやすさ”を 追求した流動食 「メイバランス」

トータルミルクプロテインを含み、幅広い栄養組成や風味、容器のバリエーションでさまざまなシーンに対応できる流動食。



1993

日本初の低たんぱく組成流動食 「リーナレン」

特定のニーズに合わせて、たんぱく質やミネラル配合量を調整した高機能流動食。



1995

スズメバチの研究から生まれた 「VAAM」ブランド誕生

運動による脂肪の代謝に着目。2022年に特定保健用食品にリニューアル。



製菓と乳業が協力し
コラボ商品続々登場！

1994 「きのこの山アイス」

1995 「ブルガリアヨーグルト
ソフトキャンデー」

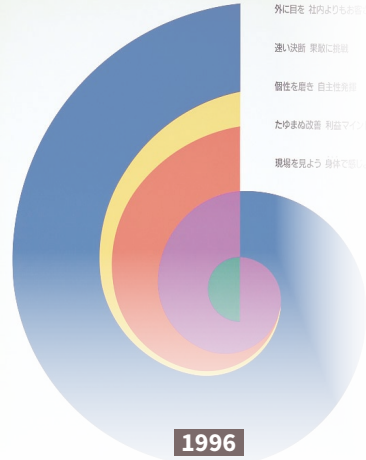


1994

自社開発の抗生物質

「セフジトレンピボキシル」

幅広い感染症の標準治療薬として登場。日本だけでなく、スペインやトルコなど、世界26カ国で販売。



外に目を 社内よりもお客さま
速い決断 果敢に挑戦
個性を磨き 自主性発揮
たゆまぬ改善 利益マインド
現場を見よう 身体で思いを

1995
関節機能改善剤
「精製ヒアルロン酸」

安定供給、品質、情報提供の3つの約束を遵守し、医療関係者が安心して使用できるジェネリック医薬品を提供。

1996
焼き菓子里にチョコが染み込んだ
新食感
「ガルボ」

サクサクに焼き上げたスポンジケーキに、特殊な製法でチョコレートをじっくりしみこませた不思議な食感のお菓子。



1999
抗うつ薬
「フルボキサミン
マレイン酸塩」

うつ病と不安障害に有効な医薬品で、日本初の選択的セロトニン再取り込み阻害薬 (SSRI) として発売。

1999
パリ国際食品見本市で金賞受賞！
「フラン」

“大人、シンプル、高級、新鮮”をコンセプトに、スティック状のビスケットにホイップしたチョコレートをコーティングしたスティックチョコ。人気バンドGLAYを起用したCMやキャンペーンも実施し、大ヒット商品となった。



1994
合言葉は“100円でいつでもこの味を”
「明治 エッセル スーパーカップ 超バニラ」

乳脂肪の代わりに植物性脂肪と卵黄脂肪を用いることで、100円でプレミアム級のおいしさと200mlのボリュームを実現。名前の由来は「Excellent」と「Essential」。

1996
新発想！片手で絞れる
「明治チューブでバター1/3」

チューブタイプだから冷蔵庫でスペースを取らない。コレステロールも普通のバターの3分の1。



1997
きれいな息と歯のために
キシリトール+リフレッシュで
「キシリッシュ」

食品添加物「キシリトール」の認可を契機に、ガム市場へ本格参入。スリーブ構造の箱タイプのパッケージも受け入れられた。



1998
新しい宅配壇を採用し
安全・衛生面が向上

ポリキャップとシュリンクフードを採用し、従来よりも安全・衛生面が向上。高さも低くし冷蔵庫への収納も簡単に。



1998
カカオが持つ健康機能に注目した
「チョコレート効果」

1箱にカカオポリフェノールを1,000mg含みながら、おいしさとほどよいビター感を両立させたチョコレート。特徴をストレートに表現したネーミングも支持された。

物流システムの改善や省力化など、徹底したコスト削減を実現



関東マザーセンター（菓・1993・埼玉 坂戸）



守谷工場（乳・1998・茨城）

写真のほか、1990年代操業開始で現在も稼働している工場は、佐久工場（現 長野チーズ工場：乳・1992・長野）

1970-99

メイジセイカ・シンガポール

海外に生産拠点を移し、低コストの原材料と豊富な労働力を活用する足掛かりとして、1974年1月にはシンガポールのヒルマンビスケット社に資本参加した。同年3月には、社名をメイジセイカ・シンガポール社と改め、東南アジアの菓子生産拠点とした。

1982年3月、シンガポールの合併会社メイジセイカ・シンガポール社を全額出資会社とし、東南アジア・中近東の生産・輸出拠点に位置付けて技術水準の向上に取り組んだ。気温の高い地域にも対応できるチョコレート製品の投入は従来からの課題であったが、明治製菓が日本市場で販売していた、スティックタイプのクラッカーにチョコレートをディップするチョコスナック「ヤンヤン」の製造・販売をシンガポールで開始した。暑い中でもおいしいチョコレートが味わえ、チョコレートをつけて食べるのが楽しいと、東南アジア・中近東の子どもたちの大きな支持を得た。



メイジセイカ・シンガポール社で生産された「ヤンヤン」と「ハローパンダ」のパンフレット

タイ・メイジ・ファーマシューティカル

1979年11月にタイに設立したタイ・メイジ・ファーマシューティカル社では、原末から製剤までの生産体制を整え、1981年1月から「カナマイシン硫酸塩」の生産を開始した。現在は、タイ国内向けに製造販売を行うとともに、日本品質基準を満たすジェネリック医薬品を日本向けに輸出している。



P.T.メイジ・インドネシア・ファーマシューティカル・インダストリーズ

1974年5月、抗生物質製造のためインドネシアに、P.T.メイジ・インドネシア・ファーマシューティカル・インダストリーズ社を設立した。現在は、インドネシア国内向けに製造販売を行うとともに、日本品質基準を満たすジェネリック医薬品を日本向けに輸出している。



CP メイジ

1989年にタイ有数の農畜産加工企業集団、CPグループ（チャロン・ボカバングループ）と合併会社CPメイジ社を設立した。翌1990年、バンコク北方のサラブリ県に市乳工場を建設し、「CP-MEIJ」などの商標を付けた飲用牛乳やヨーグルトなどを製造販売した。明治乳業の技術による製造ラインと品質管理体制により、通常のチルド牛乳に加え、タイ固有のハーブを用いたフレーバー牛乳、LL牛乳、ドリンクヨーグルト、ソフトヨーグルトなどを製造し、タイ市場に浸透していった。



スタウファー・ビスケット

1985年、米国のビスケット・クラッカーメーカーのスタウファー・ビスケット社（1871年創立）との合併で現地生産会社スタウファー・メイジ社を設立し、1986年8月、「ヤンヤン」の米国版「スキニーディップス」の生産を開始した。スタウファー・ビスケット社は、1990年に明治製菓の出資によって子会社となり、合併会社のスタウファー・メイジ社は1992年に解散した。



テデック・メイジ・ファルマ

1991年2月、スペインの会社の株式の60%をメイジセイカ・ヨーロッパ社（1990年12月設立）を通じて取得し、欧州への本格的進出の拠点とした。2017年に100%子会社化し、2019年に社名をメイジ・ファルマ・スペイン社に変更した。現在は、スペイン国内向け製造販売、輸出を行っている。



廣州明治制果有限公司

1993年6月に、広東省広州市経済技術開発区内に合併会社の廣州明治制果有限公司を設立した（2016年独資化）。中国での現地販売を目的とした進出は、日本の菓子企業としては初めての試みだった。その後、「ヤンヤン」「グミチョコ」の生産販売を行った。



◆海外企業との主な取り組み(1970～1999年)				
設立年	対象法人名	形態	内容	現状(終了年)
1973	明治マクビティ(日本)	合併	日本にユナイテッドビスケット社(英国)との合併で設立マクビティダイジェスティブビスケットを製造・販売	1998
1974	メイジセイカ・シンガポール	子会社	1974年に資本参加したヒルマンビスケット社より改称。1982年全額出資会社とし、東南アジア、中近東向けの生産・輸出拠点とする。1988年、名古屋工場の「カルミン」、関東工場の「ヤンヤン」の生産を移管	現存
1981	メイジ・コンフェクショナリー(タイ)	合併	タイの会社との合併で設立菓子を製造・販売	1997
1984	UBメイジヨーロッパ(英国)	合併	ユナイテッドビスケット社(英国)との折半出資で設立	1995
1984	コロンビーナ・メイジ(コロンビア)	合併	「カール」の製造技術を提供。「スナッキー・メイジ」の商品名でテスト販売後、1984年12月、コロンビアの会社との合併で設立し、本格生産・販売開始	1998
1985	スタウファー・メイジ(米国)	合併	スタウファー・ビスケット社(米国)との合併で設立。1986年5月工場完成、「スリムスティックス」「スキニーディップス」「ディズニークッキー」の商品名で生産開始	1992
1986	台湾明治股份有限公司	合併	台湾の会社との合併で設立。「チェルシー」を製造販売	2000
1988	メコーインク(米国)	合併	米国の会社との合併で設立。フラクトオリゴ糖の米国での製造販売	2017
1989	華明医薬有限公司(中国)	合併	中国の会社との合併で設立1993年に社名を汕頭経済特区明治医薬有限公司に変更抗生物質等を製造販売	2023
1989	ベガンメイジインダストリーズ(フランス)	合併	フランスの会社との合併で設立。フラクトオリゴ糖の欧州での製造販売	現存
1990	スタウファー・ビスケット(米国)	子会社	創業家から株式の51%を譲り受け	現存

ベストセラー『ハリーポッターと賢者の石』が映画でも大ヒット。また、アジア初のサッカーワールドカップが日韓共同で開催され、熱戦が繰り広げられました。日本では「自然の叡智」をテーマに愛・地球博が開催された一方で、米金融機関に端を発するリーマンショックで世界の経済が一気に冷え込みました。

乳酸菌の新しい可能性！ 「明治プロビオヨーグルトLG21」

2000 食べるタイプ/宅配専用食べるタイプ
2002 ドリンクタイプ/宅配専用ドリンクタイプ

明治が保有する2,500種類以上（当時）の乳酸菌ライブラリーの中から発見されたLG21乳酸菌を採用、新たな健康価値を創造した。2022年に「一時的な胃の負担をやわらげる」で機能性表示食品としてリニューアル。



宅配専用



LG21 乳酸菌



“即攻元気”がテーマ 「ザバス パーフェクトプラス アミノリフレッシュゼリー」

スポーツやアウトドアのお供に。アミノ酸を配合した飲みやすいゼリードリンク。2001年よりザバスブランドを外販販売。



2000 社会現象にもなった！ 「365日のバースデーティ」

マーブルタイプの小粒チョコとティデビアがセットになった商品。それぞれ誕生日と名前付き。

2001 「先天性プロテインC欠乏症治療薬」

血漿から精製した血漿分画プロテインCを活性化させた製剤。オーファンドラッグに指定されている。

2001 「国産初の鶏用7種混合オイルワクチン」

採卵鶏のさまざまな感染症を1回注射で予防するために開発された7種混合不活化オイルアジュバントワクチン。



2002 スプーン1杯の「飲むコラーゲン」 「アミノコラーゲン」

コラーゲンは塗るものという常識を覆し、飲むというスタイルが、美容や健康に関心の高い女性から支持された。

チーズや流動食の 新たな生産拠点が操業

写真のほかに、2000年代操業開始で現在も稼働している工場は、九州工場（乳・2002・福岡 八女）、関西工場（乳・2005・大阪 貝塚）、群馬医薬・栄養剤工場（現群馬工場・群馬栄養食工場：乳・2010・群馬 伊勢崎）。



十勝工場（乳・2008・北海道）



群馬栄養食工場（栄養・2008・群馬 伊勢崎）

2002 牛乳市場No.1ブランド 「明治おいしい牛乳」

牛乳の中の溶存酸素を低減した状態で加熱殺菌を行う「ナチュラルテイスト製法」で新鮮な生乳のようなおいしさを実現。



2003 飲み込みやすさに配慮した とろみ調整食品 「トロメイク」

飲み物やスープにとろみを付けられる粉末状のとろみ調整食品。飲み込みの難しい方にも食事の喜びを味わってもらうために開発された。



2002 抗生物質 「ビアペネム」

幅広い抗菌スペクトルを持つ注射用カルバペネム系抗生物質。

2003 糖質の吸収速度に 配慮した高機能流動食 「インスロー」

吸収速度の緩やかな糖質パラチノースを採用。日本人の栄養バランスに配慮した本格的な高機能流動食。



2003 ボリュームたっぷり 「明治プリン超Big」

ワンコイン（100円）で買える超Bigサイズのプリン。コンビニエンスストアを中心に導入が広がり、大ヒット商品に。



明治東陽町ビル

2001年9月に竣工。東京都江東区新砂に建てられた明治乳業初の本社ビル。もともと物流拠点用の土地として取得したものだったが、賃貸契約の京橋第一ビルが手狭になっていたため、物流センターに加えて本社ビルが建設された。建物は地上14階地下2階、外装には白タイルと大面積のガラスを採用し、食品会社としての「清潔感」と「気品」を打ち出した。





高力カオブームをけん引！

2005 「チョコレート効果カカオ72%」BOX

2006 「チョコレート効果カカオ86%」BOX

2006 「チョコレート効果板カカオ99%」

書籍『チョコレート・ダイエット』（楠田枝里子著）などをきっかけに、高力カオチョコレートに消費者の関心が高まる中、カカオ分を「%」表示したパッケージデザインに変更し、BOXタイプや板タイプを発売。板タイプではカカオ99%も発売され注目を集めた。



2006

抗生物質

「アンピシリンナトリウム・スルバクタムナトリウム」

感染症治療や手術など高度な医療技術の根幹を支える薬として、2022年には経済安全保障推進法に基づく特定重要物資に指定された。

2007

世界初！キューブタイプの粉ミルク

「明治ほほえみらくらくキューブ」

粉ミルクをキューブタイプに成型した世界初の製品で、従来の顆粒タイプと同じ栄養機能でありながら、計量時の失敗や手間を解消した画期的な乳児用調製粉乳。

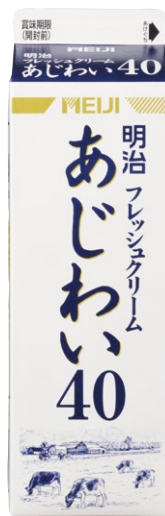


2008

高血圧症治療薬

「アムロジピンベシル酸塩」

有効性や安全性に関わる基礎的試験や、市販後の調査も実施した。明治の屋号を初めて付けたジェネリック医薬品でもある。



2008

業務用クリーム

「明治フレッシュクリームあじわい」

あじわいこだわり製法（特許取得）により、従来のクリームにない豊かなミルク風味とすっきりとした後味を実現した業務用クリーム。

CSR

環境

社会貢献

グループ

推進

3〜10月

新年度

10月

10月

10月

10月

10月

10月

10月

10月

10月

10月

10月

10月

10月

10月

10月

10月

10月

10月

10月

10月

10月

10月

10月

10月

10月

10月

10月

10月

10月

10月

10月

10月

10月

10月

10月

10月

10月

10月

10月

10月

10月

10月

10月

10月

10月

10月

10月

10月

10月

10月

10月

10月

10月

10月

10月

10月

10月

10月

10月

10月

10月

10月

10月

10月

10月



2000－2009



2009

新たな健康価値に着目し、ヨーグルトブームをけん引した**「明治ヨーグルトR-1」**

新しい可能性を秘めたEPS（多糖体）を産生するR-1乳酸菌を使用。2011年にテレビで紹介されたことがきっかけとなって、一時的に品薄になるほどの人気を博した。

meiji

2009

新生**「明治グループ」**として新たな一歩を

2009年4月、明治製菓と明治乳業が経営統合し、共同持株会社の明治ホールディングス株式会社を設立。ブランドマークも一新された。

2009

抗うつ薬

「ミルタザピン」

新規の作用機序NaSSAにより、うつ病に伴うさまざまな症状を改善。うつ病治療に新たな選択肢が加わった。

2009

抗生物質

「テビペネムピボキシル」

世界初の経口用カルバペネム系抗生物質。従来の抗生物質に耐性を持つ細菌に対して効力を持つ。

お客さまと明治を結ぶPR館

おいしさのヒミツや安全・安心へのこだわりなど、製造工程を見て学べる工場見学施設がオープン。2015年、明治なるほどファクトリーに名称変更した。現在では、菓子工場を含む全7工場で展開している。



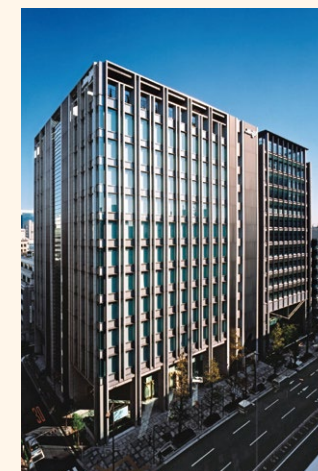
ヨーグルト館（関西工場内・2006）



みるく館（守谷工場内・1998） チーズ館（十勝工場内・2008）

明治京橋ビル

2004年11月に竣工。築後約70年を経て老朽化し、安全性や機能面で限界に達していた明治製菓の旧本社ビルが建て替えられた。耐震性に優れた構造と高度なインテリジェント機能をあわせ持つ先進の設計を採用。同年12月、1階にはチョコレートの新しい食べ方や楽しみ方を提案する場として、直営の「100% ChocolateCafe.」を開設した。





2011年3月に発生した東日本大震災では、地震・津波・原発事故により未曾有の被害が発生しました。そうした中、同年7月のFIFA女子ワールドカップでの”なでしこジャパン”の優勝は人々に大きな勇気を与え、また2013年に2020年オリンピック・パラリンピックの東京開催が決定し、国内各地で準備が進められていきました。そして2019年5月、令和を迎えることになりました。

2011

明治グループ 新経営体制に移行

事業再編により、株式会社 明治とMeiji Seika ファルマ株式会社が発足。

動物薬

2010 「マルボフロキサシン」

2014 「アルファキサロン」

動物薬事業の重点領域、畜水産分野は2010年に動物専用注射用フルオキノロン系抗菌剤「マルボフロキサシン」を発売、2015年には牛用抗菌注射剤の売り上げ第1位を獲得した。コンパニオンアニマル分野では2014年、犬猫用麻酔注射剤「アルファキサロン」を発売し、2016年に犬猫用麻酔注射剤の売り上げ第1位を獲得した。

2010

1日分のカルシウムと鉄分 「明治ミルクで元気」

1日に必要なカルシウムと鉄分が入った宅配専用低脂肪タイプミルク。宅配量商品売上高No.1商品に。

2012

ブランドの商品力強化 「VAAM」

水なしで飲める「ヴァーム」「スーパーヴァーム」顆粒タイプを発売。いつでも、どこでも手軽に飲用できる商品の発売により、さらなるユーザー拡大を図った。



2013

部門統合で新たな価値を創造 「グリーンカカオ」 「チョコレートクリエイト 味わい<ホワイト>」

販売チャネルが重なる明治乳業の業務商品部門と明治製菓のフードクリエイト部門を統合。乳とカカオを融合させたメニューを提案。フルーティーな酸味と力強いカカオ感が特長のチョコレート「グリーンカカオ」や、生クリームの”フレッシュ感”にこだわった冷蔵流通のチョコレート「チョコレートクリエイト 味わい<ホワイト>」を発売し、個人洋菓子店などを開拓した。



2014

カラダに大切な栄養素がまとめて摂れる 「明治メイバランスMiniカップ」

1本125mlの少量で200kcalのエネルギーと6大栄養素（たんぱく質・脂質・糖質・食物繊維・ビタミン・ミネラル）がまとめて摂れる栄養補助食品。カップは誰にでも持ちやすく、飲みやすいユニバーサルデザイン。



2015

抗生物質 「タゾバクタム・ピペラシリン水和物」

感染症治療や手術など高度な医療技術の根幹を支える薬として、2022年には経済安全保障推進法に基づく特定重要物資に指定された。

2015

プロビオシリーズ第3弾！“プリン体”と戦う乳酸菌 「明治プロビオヨーグルト PA-3」

明治が保有する数千種類の乳酸菌ライブラリーの中から、プリン体への可能性に着目して選び抜いたPA-3 乳酸菌を配合。プリン体が気になる人に、ヨーグルトの新たな健康価値を提案した。



2015

速攻吸収製法採用！ 「(ザバス)ミルク グレープフルーツ風味」

独自の速攻吸収製法を活用し、たんぱく質の吸収が速く、ミルクなのにすっきりとしたフルーティーな風味の「ザバスミルク」を発売した。



2014

スペシャルティ・チョコレートの市場創造 「明治 ザ・チョコレート」

チョコレート感度の高い大人が増え、カカオ豆、製造工程にこだわったBean to Barをコンセプトに誕生。店頭では専用什器など専門店のような演出で商品の世界観を訴求した。2016年にはスペシャルティ・チョコレート市場を創出するビジョンの下、クラフト感のあるパッケージデザインにリニューアル。国際コンクールのiTQi、ICAでの受賞、サロン・デュ・ショコラパリ2016への出展など品質の高さを国内外に示した。※画像は2016年品



写真は2016年発売時のもの

2016

新容器(ウルトラエッジ)を採用 「明治おいしい牛乳」

利便性とおしさを向上させる、牛乳に最適な新容器を採用。開けやすく注ぎやすい広口キャップ。遮光性に優れ、新鮮な生乳のおいしさが長持ちし、無駄なくおいしく飲める900mlとした。



2016

統合失調症治療薬 「アセナピンマレイン酸塩」

「統合失調症」を適応とした抗精神病薬「アセナピンマレイン酸塩 舌下錠」を発売した。口の中で速やかに崩壊し、素早く効果が現れる。

これまで100年ありがとう。
さあ、これからの100年へ。

meiji 100
YEARS YOUNG

東京2020オリンピック・パラリンピック meijiの取り組み

2017-2021

2013年、IOC（国際オリンピック委員会）総会で2020年夏季五輪の東京開催が決定。2015年、(株)明治は東京2020ゴールドパートナー（乳製品・菓子）となり、2017年にオリンピック・パラリンピック推進部を発足した。2020年、新型コロナウイルスが世界的に蔓延し、1年延期となって2021年に無観客開催された。

子どもたちの成長サポートプロジェクト

2017年「POWER!ひとくちの力 meiji Tokyo 2020Fes」を開始した。全国で11回にわたって行われ、小学生がトップアスリートと競技体験や食育プログラムで食の大切さを学んだ。また、ショッピングモールでも競技体験と食育をセットにした流通キャラバンを実施し、約40,000人を動員した。



ホストタウンの取り組み

自治体のホストタウン活動を支援し、大会以降も継続したビジネス関係を構築するための活動に取り組んだ。ブルガリア共和国新体操チームのホストタウンである山形県村山市をはじめ、4つの自治体と連携協定を締結し、市民の健康増進活動を実施した。



選手村や競技会場に明治商品を提供

選手村ではアスリートに、43カ所ある競技会場では大会関係者やボランティアに商品を提供した。特に菓子は非常に好評で、多くの選手がSNSで発信し話題となった。



社員のボランティア活動とD&Iの取り組み

大会では、100人以上の社員がボランティアとして活躍。社員参加型プロジェクト「オリパラアンバサダー」には約4,000人が登録した。さらにダイバーシティセミナーやパラリンピアン講演会、ボッチャ大会等の取り組みを重ね、社員のD&Iへの意識が高まった。



大会前の活動と商品展開

乳製品・菓子のカテゴリーにおいて、大会エンブレムやマスコットをあしらった商品や東京2020公式ライセンス商品などを展開した。大会1年前の各イベントでは、流通キャラバンと連動して「meiji 2020 COOLING SPOT / 盛りすぎアイス屋さん」を出店した。



明治イノベーションセンターの設立

「明治グループ100周年記念事業」と位置付けて、神奈川県小田原市と埼玉県鶴ヶ島市に分かれていた(株)明治の研究拠点を統合し、東京都八王子市に新たな研究拠点を設立した。明治のイノベーションの中核になるというビジョンを受け、「明治イノベーションセンター」と命名された。



2016

抗アレルギー薬 新製品の販売 「ピラスチン」

大鵬薬品工業が国内開発した新規経口アレルギー性疾患治療薬「ピラスチン錠」について共同販売契約を締結し発売。2026年6月に共同販売契約を終了した。

2018

KMバイオロジクス 事業開始

KMバイオロジクスは一般社団法人化学及血清療法研究所の事業を継承し、明治ホールディングス株式会社の連結子会社となった。ヒト用および動物用ワクチン、血漿分画製剤の研究開発・製造技術を基盤に事業を開始。



2019

哺乳瓶に注ぐだけの液体タイプ 「明治ほほえみ らくらくミルク」

お湯を沸かして粉ミルクを溶かすといった調乳作業が不要。哺乳瓶に移し替えるだけで、すぐに授乳できる乳児用液体ミルク。災害時も安心。



2019

究極のおつまみチーズ 「明治北海道十勝 カマンベールチーズ燻製」

カマンベール、スモークチーズ市場拡大の中、まろやか燻製法（2023年特許取得）によるやさしい燻製香とクリーミーな味わいの両立を実現。家飲みのおつまみなど大人の贅沢のために。



多様なニーズに応える4工場が稼働

2010年代には、菓子と乳製品の製造技術を組み合わせた関西アイスクリーム工場、主に牛乳とヨーグルトを製造し、明治なるほどファクトリーを併設する愛知工場、流動食・栄養食への需要に対応する関西栄養食工場、そしてスポーツ栄養市場の急拡大に対応する倉敷工場の4工場が稼働した。イノベーション創出、見学施設の充実など多様なニーズに応える体制を整えた。



関西アイスクリーム工場（乳・2011・大阪 貝塚）



愛知工場（乳・2014・愛知 稲沢）



関西栄養食工場（栄養・2014・大阪 貝塚）



倉敷工場（栄養・2019・岡山）

2000-19

広東明治医薬有限公司

汕頭経済特区明治医薬有限公司は2011年に販売会社の広東仲景堂薬業を完全子会社化し、2012年に広東明治医薬有限公司に社名変更。明治医薬(山東)有限公司と展開してきた医薬品の生産・販売とともに、輸入・仕入れ販売が可能となった。



明治医薬(山東)有限公司

2003年、中国山東省の山東魯抗医薬社などと、医薬品の製造・販売を目的とした合併会社、明治魯抗医薬有限公司(2011年に明治医薬(山東)有限公司に社名変更)を設立した。独自の発酵生産技術を用いた製品をコストメリットの高い中国で生産し、価格競争力の強い製品を世界市場に供給することを狙いとした。工場は2005年に稼働し、動物薬の硫酸コリスチン、人体薬ミデカマイシンの原薬を生産・販売、2013年から人体薬バンコマイシン原薬も生産・販売した。2022年には出資持分を全て譲渡した。



タイ・メイジ・フード

2006年、タイの大手スナック会社フレンドシップ社との合併会社タイ・メイジ・フード社を設立し、タイで生産した「コパン」と「カール」のマーケティング・販売を開始した。2016年に独資化、2018年には「コパン」・「カール」の生産を終了した。現在は、菓子や「アミノコラーゲン」等の輸入販売の他、2022年に粉ミルクの「EZcube GU formula」、2025年に粉ミルク「EZcube 1F」の発売を開始した。



メイジ・インディア

有望市場になることが見込まれるインド市場への事業展開を進めるため、2011年、メイジ・インディア社をムンバイに設立。菓子事業と健康食品事業の将来の本格事業展開の確認を行うことを目的とし、関連社から「ハローパンダ」「ヤンヤン」の輸入・販売、「アミノコラーゲン」の製造・販売を行った。2015年には「ヤンヤン」のインドでの製造のため現地メーカーに製造委託を決定し、2017年3月に現地生産を開始した。2021年度、合併を解消し、当社持分を旧合併パートナーに売却した。



P.T.メイジフード・インドネシア

2001年にペトラ・フーズ社(現デルフィ社)との合併でP.T.セレス・メイジ・インドタマ社を設立。2017年、明治グループの100%子会社となった。社名をP.T.メイジフード・インドネシアに変更し、「ハローパンダ」「ラッキースティック」などのチョコスナック群を主力商品に、インドネシア国内および東南アジア、中東など市場を広げていった。



明治制菓食品工業(上海)有限公司

2004年、中国事業の中核となる拠点として明治制菓(上海)有限公司を設立し、独自の販売ルートの開拓に着手した。2005年には本社と中国国内の各拠点が一体となって事業を展開すべく中国事業推進室を設置。「アーモンドチョコレート」「メルティーキス」の現地でのリパックおよび販売を開始、早期の現地生産を模索した。2005年には上海に明治制菓食品工業(上海)有限公司を設立。2006年に工場を建設し、現地生産を始めた。2008年、チョコレートとチューインガムの新ラインを導入して生産能力を倍増。主力の「メルティーキス」に中国独自の味を追加して幅広い層の購入意欲に応えるギフト用商品を拡充するなど事業展開を図った。2013年には明治制菓(上海)有限公司を解散、2015年に清算終了し、販売機能を明治制菓食品工業(上海)有限公司に移管した。



明治乳業(蘇州)有限公司

2011年、明治乳業(蘇州)有限公司を設立した。LL牛乳主体の中国にあって、拡大が見込め、技術力や商品開発力で強みを持つチルド牛乳市場に参入することを決め、2013年に新工場が竣工した。上海を中心とする華東地区で、業務用牛乳、業務用クリームを生産・販売を開始し、市販用では「明治醇壹鮮牛乳」(200ml・450ml・950ml)「明治ブルガリアヨーグルト」(100g・400g)の販売を開始した。2014年には中容量の「明治ブルガリアヨーグルト」(180g)と4連のソフトタイプの生産・販売をスタート。華東エリアに続き、北は北京、南は広州、内陸部は成都、武漢などに販売エリアを拡大した。2015年には、「明治醇壹低脂肪」「明治伏漢乳酸菌飲料」の生産・販売も開始した。



メイジ・アメリカ

2007年、米国、スタウファー・ビスケット社に明治ブランド品販売担当を置き、本格的な販売を開始した。2011年には米国市場における明治ブランド品のマーケティング・販売を行うメイジ・アメリカ社を設立。その傘下に生産拠点としてスタウファー・ビスケット社と、その子会社ラグーナ・クッキー社を置いた。スタウファー品や「ハローパンダ」の製造、「チョコレートムス」のリパック生産、その他輸入品の販売等を行っている。



明治雪糕(広州)有限公司

都市化の進展、個人所得の上昇などを背景に中国アイスクリーム市場は成長を続け、消費者の良質で高級な商品に対する購買意欲も旺盛となる中、2012年、広東省広州市広州経済技術開発区に(株)明治100%出資のアイスクリーム事業子会社、明治雪糕(広州)有限公司を設立した。2014年に工場が竣工し、2015年に生産・出荷を開始した。合併会社の時代から20年以上にわたり中国で愛されている「練乳あずき」「栗あずき」や新たに「アーモンドチョコレートアイスクリームバー」などを販売している。



DMバイオ

2013年、韓国、東亜ソシオホールディングス社との合併会社、DMバイオ社を仁川経済自由区域に設立した。2014年にはバイオ医薬品の原薬から最終製品まで一貫生産および受託生産を可能とする工場が仁川市松島地区に竣工し、乳がん治療薬トラスツマブの後続品DMB-3111の国内臨床第I相試験を実施し、高い同等性、同質性を達成した。この成果を踏まえ、2017年にバイオ医薬品の受託製造サービスを開始した。

また、DMB-3111についてハンガリーの製薬企業ゲデオン・リヒター社と2016年に技術ライセンス契約を結び、共同開発をグローバルに展開する体制を整えた。

2021年、当社は保有株式を全て譲渡した。



メドライク

2015年、インドのメドライク社の株式を100%取得し、子会社化した。日本国内で急速に拡大するジェネリック医薬品市場への製品の供給に十分対応する生産能力の獲得、新興国の低価格薬剤需要に対応し得るコスト競争力の強化を図るために必要な生産インフラの獲得、インド・アジア・アフリカ諸国での販売網拡大により海外展開の拡大を目指した。

1976年に設立されたメドライク社は、インド国内に7カ所の生産拠点を持ち、医薬品製剤のCMO(医薬品製造受託)・CDMO(医薬品受託開発製造)およびジェネリック医薬品の製造・販売を英国、香港、シンガポール、オーストラリアなど世界各地で展開。世界60カ国以上で承認申請を行い、グローバルに品質が認められた約200品目の製品を上市している。最大180億錠に上る製造能力と、低コスト生産体制、70品目以上の豊富な開発パイプラインを有す。南インド最大の製剤工場Unit7は、日本向け医薬品の製剤拠点として2017年から製造を開始。PMDA*査察、GMP認証取得など日本の品質管理基準を満たしている。

*PMDA:厚生労働省所管の独立行政法人医薬品医療機器総合機構



台湾明治食品股份有限公司

2017年、台北市に台湾明治食品股份有限公司を設立した。主に日本からの乳幼児向け粉ミルクの輸入、販売を行う。2022年からは粉ミルク、「メイバランス」の他、「ザバス」シリーズ、菓子、アイス等の販売を開始した。2024年には「即攻元気ゼリー」等栄養食品の販売を開始した。



明治(中国)投資有限公司(明治チャイナ)

2019年、中国事業拡大に向けてマネジメント基盤の強化のため、明治(中国)投資有限公司(略称：明治チャイナ)を上海に設立した。中国事業全体での最適戦略を立案し意思決定の迅速化を図っていった。明治ブランドの価値向上、シナジーの最大化を図り、中国における経営基盤強化を目指した。菓子、フローズン、市乳、業務用商品など各事業商品の販売、中国事業会社の経営管理を行っている。2025年には「明治おいしい牛乳」の販売を開始した。



明治乳業(天津)有限公司

2019年、中国における牛乳・ヨーグルト事業の拡大を目的に、中国事業を統括する明治(中国)投資有限公司を通じ、牛乳、ヨーグルトなどを生産・販売する明治乳業(天津)有限公司を天津経済技術開発区に設立した。これに伴い、中華人民共和国天津市商務局および天津経済技術開発区と「産業発展への貢献と相互協力体制の構築に関する協定」を締結した。明治乳業(天津)有限公司は中国5カ所目の生産拠点となる。中国北部エリアでの事業拡大を目指し、2023年、生産を開始した。



◆海外における主な取り組み(2000～2019年)

設立年	対象法人名	形態	内容	現状(終了年)
2001	広東明治医薬有限公司(中国)	子会社	医療用医薬品の生産・販売、輸入・仕入れ販売	現存
2001	P.T.メイジフード・インドネシア	子会社	「ハローパンダ」「ラッキースティック」などのチョコスナック群を主力商品に菓子の製造・販売。2001年にシンガポールの会社との合併でP.T.セレス・メイジ・インドタマ社を設立。2017年に100%子会社化し、社名をP.T.メイジフード・インドネシアに改称	現存
2003	明治医薬(山東)有限公司(中国)	子会社	動物薬の硫酸コリスチン、人体薬ミデカマイシンの原薬を生産・販売。2003年、山東魯抗医薬社などと合併会社である明治魯抗医薬有限公司を設立。2011年、子会社化し改称	2022
2005	明治制果食品工業(上海)有限公司(中国)	子会社	菓子の製造・販売。「メルティーキッス」に中国独自の味を追加	現存
2006	タイ・メイジ・フード	子会社	「コバン」「カール」など菓子や「アミノコラーゲン」「粉ミルク」等の製造・販売	現存
2011	明治乳業(蘇州)有限公司(中国)	子会社	「明治醇壹低脂肪」「明治伏漑乳酸菌飲料」など牛乳・ヨーグルト等乳製品の製造・販売	現存
2011	メイジ・インドア	合併	「ハローパンダ」「ヤンヤン」などの輸入・販売、「アミノコラーゲン」の製造・販売	2021
2011	メイジ・アメリカ	子会社	菓子の製造・販売。傘下に生産拠点としてスタウファー・ビスケット社と、その子会社ラグーナ・クッキー社を置いた	現存
2012	明治雪糕(広州)有限公司(中国)	子会社	「練乳あずき」「栗あずき」「アーモンドチョコレートアイスクリームバー」などアイスクリームの製造・販売	現存
2013	DMバイオ(韓国)	合併	バイオ医薬品原薬および製剤の製造ならびに受託製造	2021
2015	メドライク(インド)	子会社	医薬品製剤のCMO・CDMO、日本向けジェネリック医薬品の製造	現存
2017	台湾明治食品股份有限公司	子会社	乳幼児向け粉ミルク、菓子、栄養食品の輸入、販売	現存
2019	明治(中国)投資有限公司(略称：明治チャイナ)	子会社	各事業商品(乳製品、菓子、アイス、栄養食品)の販売、中国事業会社の経営管理、資金管理、ガバナンス機能強化など	現存
2019	明治乳業(天津)有限公司(中国)	子会社	中国5カ所目の生産拠点。牛乳、ヨーグルトなどの製造	現存

新型コロナウイルス感染症が世界を覆いました。東京オリンピックは1年延期で開催され、無観客の中でも選手たちの真摯なプレーは観る人の心を打ちました。コロナ禍は生活スタイルやビジネスにさまざまな変化をもたらし、また、AI（人工知能）の急速な進展に人々は戸惑いつつも、AIは確実に社会に浸透。2025年には大阪での二回目の万博が開催され、新しい時代が開かれていきます。

健康にアイデアを

meiji

2021

明治グループの新スローガン 健康にアイデアを

明治グループのスローガンを「健康にアイデアを」に刷新した。これまで100年以上にわたり「おいしさ・楽しさ・健康・安心」の世界を拡げることに努めてきたが、グループ内外の食と医薬の知見を融合させ、新しい価値を創造し、「健康」というフィールドでこれまで以上に大きな役割を果たしていくことを目指した。次の100年に向けて新たな挑戦を新スローガンを通じて世界中のステークホルダーに伝えている。

2021

抗悪性腫瘍剤

「ツシジノスタート」

「再発または難治性の成人T細胞白血病リンパ腫」を適応症とした、経口投与が可能な抗悪性腫瘍剤「ツシジノスタート錠」を発売した。

2022

ナッツチョコレート市場を活性化

「ピスタチオチョコレート」

カリフォルニア産ピスタチオをまるごと使用。ペルー産カカオとピスタチオペーストを使用したチョコレートで、コク深い味わい。訪日外国人にも人気。

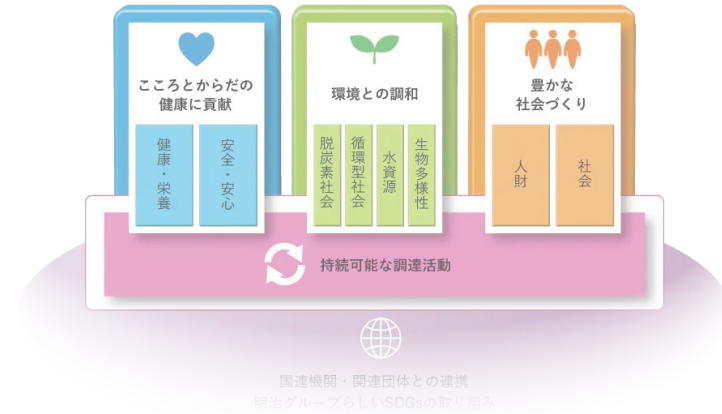
2023

「原材料、乳製品のみ」で作られた 国内初※のアイスクリーム

「明治 Dear Milk(ディア ミルク)」

原材料は北海道十勝製造の乳製品のみ。余計なモノを削ぎ落とすことで、ミルク本来の濃厚なコクと、すっきりとした後味を実現した。

※当社調べ



2023

コレステロールや血圧が気になる方に向けた 機能性表示食品

「チョコレート効果Wプラスカカオ72%」

日本初※、カカオフラバノールの働きで「善玉コレステロールを増やす」機能性表示食品として登場。同年、「血圧が高めの方の血圧低下を助ける」機能も加え、「チョコレート効果Wプラスカカオ72%」として発売。

※消費者庁機能性表示食品の届出情報検索にて「コレステロール」で検索（2015年4月～2022年11月）



2023

R-1乳酸菌EPSを2倍配合！

「明治プロビオヨーグルトR-1 ドリンクタイプThe GOLD」

多糖体“R-1乳酸菌EPS”を、通常品の2倍となる6.6mg配合。2023年6月に宅配限定で発売し、好評につき、「2倍」を打ち出したパッケージデザインで全経路での販売に広げた。



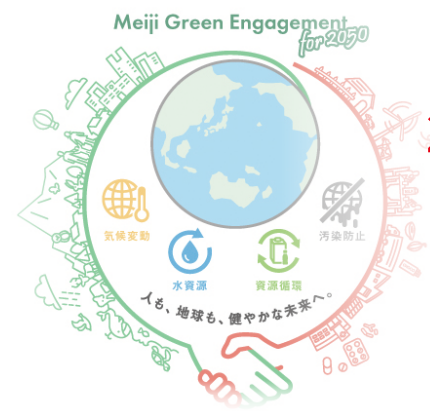
左が宅配品、右が市販品

2024

「明治おいしい」ブランドから新たな乳飲料

「明治おいしいミルクコーヒー」

「明治おいしい牛乳」に使われるこだわりの生乳を50%以上使用。生乳の消費拡大に貢献。



2023

子育ての不安、 疑問の解消に役立つアプリ

「赤ちゃんノート」

育児記録や育児に役立つ情報の収集、当社栄養士への栄養相談ができるアプリを開発し提供を開始。



2023

「明治おいしい」ブランドから生クリームが誕生

「明治おいしい生クリーム」

北海道産生乳を100%使用し、お菓子づくりにも料理にも使いやすい乳脂肪分40%。容器は、光を遮りおいしさの品質を守る「スマートパック」と、注ぎやすいキャップ式を採用。



2024

「明治ブルガリアヨーグルト」ブランド 発売50周年を記念

「明治ブルガリアヨーグルトLB81 プレーン HOME MADE STORY (ホームメイドストーリー)」

ヨーグルトの本場ブルガリアの家庭に伝統として受け継がれる、素焼きの壺で作った自家製ヨーグルトをテーマとした、乳の濃厚なコクがあじわえるヨーグルト。



2024

慢性GVHD治療薬

「ベルモスジルメシル酸塩」

「慢性移植片対宿主病（慢性GVHD）」を適応とし、免疫細胞の分化と組織の線維化に関与するリン酸化酵素であるROCK2を選択的に阻害する薬剤として世界で初めて承認された唯一の薬剤である。日本に続き、アジア各国で順次承認取得。

2024

自分の免疫力を見える化 おうちでカンタンに免疫チェック 「免疫チェック」

自宅で唾液を採取するだけで免疫状態を簡単に把握。



2025

社内新規事業創発、新たなチャレンジ！ 「明治乳酸菌発酵液」

乳酸菌発酵製法（特許出願中）によって、ジューシーで柔らかいお肉（発酵熟成肉）に仕上げる発酵乳。添加物を使わずに食材の価値を高める業務用商品。



2024

高たんぱく飲料 「(ザバス)MILK PROTEIN 脂肪0 ココア味」

シリーズ最大量、カラダづくりにも有効なミルクプロテインを30g配合。理想のカラダづくりへ。

2024

「新型コロナウイルス感染症 に対する次世代mRNAワクチン (レプリコン)」

新型コロナウイルス感染症に対する次世代 mRNA ワクチンで、従来の mRNA ワクチンよりも少ない接種量で高い中和抗体価を示す。日本に次いで欧州で承認された。



2024

腸内タイプ別パーソナルケア 「Inner Garden」

腸内細菌を測定し腸内タイプを可視化。タイプに応じたおすめの素材を配合したパーソナルココア飲料をお届け。

2024

できたての乳製品の魅力を伝える新ブランド 「FRESH CHEESE STUDIO」

独自製法により乳本来の風味のフレッシュチーズに仕上げ、「できたて」のおいしさが楽しめる。社内新規事業創発の取り組みから誕生した。



2024

軽い食感と口どけの良さ 短時間でホイップ可能な 業務用ホイップクリーム 「明治ルミエージュ」

植物性脂肪分18%。脂肪分を抑えながら、ホイップに時間がかからない。製菓業界の人手不足にも貢献。



2024

「5種混合ワクチン」

「5種混合ワクチン水性懸濁注射用」を発売した。既存の4種混合ワクチン（百日せき、ジフテリア、破傷風、不活化ポリオ混合ワクチン）に、ヘモフィルスインフルエンザ菌 b 型（Hib）の抗原成分を加えた。「2024年度グッドデザイン賞」を受賞。

2025

カカオセラミド配合 ご自愛チョコレート 「カカオボーテ」

世界で初めて素材化し※、商品化したカカオ由来の美容サポート成分カカオセラミドを配合。上質な味わいで高カカオポリフェノール含有かつ低糖仕立て。※美容成分・食品成分としてのカカオ由来セラミドの論文検索、特許検索、インターネット検索結果より



2025

キャップ付き紙容器 宅配でしか味わえないコク 「明治宅配の牛乳」 「明治宅配のコーヒー」

瓶の牛乳とコーヒーが環境に配慮したキャップ付き紙容器で新登場。脂肪分の量はそのままに脂肪球を大きくしコクを高めた独自製法で贅沢なおいしさを実現した。



2025

健康な方の血糖の管理に 「明治ヘモグロビン A1c対策ヨーグルト」

世界初※、健康な方の高めのヘモグロビンA1c低下をサポートする機能が報告されているMI-2乳酸菌入り機能性表示食品。※パッケージ上でヘモグロビンA1cに言及する乳製品として（2025年6月 先行技術調査および Mintel GNPD を活用した当社調べ）



2025

「新しすぎてチョコレートとは呼べない」 菓子誕生 「生のときしっとりミルク」

カカオとミルクを練り合わせる独自の特許製法「生ねり製法」を活用。チョコレートと生チョコレートの間の水分量で濃密な味わいを実現した。



赤ちゃんのためのビフィズス菌研究が結実

2025

「明治ほほえみ」

2026

「明治ステップ」

乳児用調整粉乳として日本初のビフィズス菌配合「明治ほほえみ」。1～3歳頃に不足しがちな鉄・カルシウムのフォローアップに加え、ビフィズス菌と亜鉛を配合した「明治ステップ」。栄養面での不安に応える。



2025

高張アルブミン製剤で日本初の100mL規格 「献血アルブミン 25% 静注 25g/100mL『KMB』」

100mL 規格の追加によって医療関係者、患者の負担軽減を期待。KMバイオロジクスが製造し、Meiji Seika ファルマが販売を担当している。

2025

バイパス止血製剤 「血友病インヒビター止血治療薬」

必要な投与量に応じて適切な規格の組み合わせを選択することで、1回あたりの薬剤の溶解本数を減らすことができるようになった。KMバイオロジクスが製造販売し、医療機関への情報提供・収集はKMバイオロジクスと日本血液製剤機構が共同で行った。

2026

手軽に腸活、のむヨーグルト 「明治ブルガリア のむヨーグルトLB81 ONE SHOT」

腸内細菌のバランスを整え、おなかの調子を良好に保つとの表示が許可された特定保健用食品。毎日の習慣にしやすい飲みきりサイズ。



2020-26

メイジ・ファルマ・USA

グローバルな視野のもとに臨床開発を進めるための現地法人として、2020年、米国ニュージャージー州、マンハッタン近郊のハドソン川対岸にメイジ・ファルマ・USAを設立した。そして、2024年、創業基盤強化のためのオープンイノベーション拠点としてマサチューセッツ州ケンブリッジにボストンオフィスを置いた。ボストンは世界トップレベルの大学や研究機関、バイオベンチャー企業が集積する地域である。革新的な技術が創出されるこの地で、ベンチャー投資を中心としたスタートアップとの連携を図り、グローバルにイノベーションを創出することを目指している。



台湾明治医薬股份有限公司

台湾における医療用医薬品の販売等を展開する台湾明治医薬股份有限公司を2024年に設立し、2025年に営業を開始した。アジア第5位の医薬品市場である台湾に拠点を設け、事業基盤を構築し、感染症領域におけるアジアのリーディングカンパニーへの道を切り開く。

台湾明治医薬股份有限公司は台湾食品薬物管理署(TFDA)より、慢性移植片対宿主病(慢性GVHD)治療薬の選択的ROCK2阻害剤「ベルモスジルメシル酸塩錠」の薬事承認を経て、販売を開始した。



メイジ・フード・ヨーロッパ

2020年に粉ミルクカテゴリーのリーダーであるダノン社と、欧州市場向けキューブタイプの粉ミルク製造に関する事業提携について、基本合意に達した。当グループがキューブ製造技術を提供し、ダノン社が同社ブランドのキューブタイプ粉ミルクを欧州で発売することとなった。本事業推進のため、同年、オランダのアムステルダムにメイジ・フード・ヨーロッパを設立。

2021年、ダノン社は同社ブランドのキューブタイプ粉ミルクを英国で発売開始。2023年にはフランス、イタリア、エストニア、ラトビア、リトアニアでも発売を開始していった。市場拡大に伴う生産能力拡大のため、2024年、メイジ・フード・ヨーロッパの増資を行った。



メイジ・フード・アジアパシフィック

(株)明治は2025年、シンガポールにメイジ・フード・アジアパシフィックを設立した。アジア太平洋地域内の事業拡大を目指し、エリア内の5つの子会社を束ね、現地のニーズに即した価値提供を実現できるバリューチェーンの構築やマネジメント体制への進化を図る。



メイジ・フード・ベトナム

2021年、年間出生数が約150万人※(日本の約1.7倍)と今後も市場拡大が見込まれるベトナムにメイジ・フード・ベトナムを設立。海外市場での持続的な成長基盤確立を目指す。また、より迅速に営業活動を進めていくとともに、ベトナムにおける女性の低栄養問題の解決に努め、2018年から2025年には工場働く女性社員の健康状態の改善のため、栄養改善事業を行った。栄養士による栄養教育や栄養強化ミルクの提供・販売を通じ、継続的に栄養状態が改善されることを目指した。(2025年終了)

※2020年ベトナム統計局

明治食品(広州)有限公司

2020年、中国における牛乳・ヨーグルト事業および菓子事業の拡大を目的に明治(中国)投資有限公司を通じて設立。2024年からグループ初の乳製品と菓子の複合工場として稼働を開始した。

これにより、明治乳業(蘇州)有限公司と明治乳業(天津)有限公司の3工場体制となり、これまで供給できなかった地域のお客様に当社商品を届ける体制を構築した。



メイジ・ファルマ・アジア

感染症領域におけるアジアのリーディングカンパニーを目指し、ASEAN全域の事業・コマーシャル戦略のハブとしての役割で発足。感染症領域や血液がん領域、慢性疾患領域を中心とした医薬品・ワクチンの販売等を行う。



◆海外における主な取り組み(2020～2026年)				
設立年	対象法人名	形態	内容	現状(終了年)
2020	メイジ・ファルマ USA	子会社	アメリカでの臨床開発、医薬品開発	現存
2020	メイジ・ニュージーランド	子会社	食品の生産と輸出版売事業、スポーツ栄養事業の中国展開、乳原料調達戦略強化	清算予定
2020	メイジ・フード・ヨーロッパ(オランダ)	子会社	欧州におけるキューブタイプ粉ミルクの生産技術支援、生産設備の管理。その他カテゴリーの市場性検討	現存
2020	明治食品(広州)有限公司(中国)	子会社	中国華南エリア向け牛乳・ヨーグルト、菓子の生産、販売	現存
2021	メイジ・フード・ベトナム	子会社	乳幼児用粉ミルクなどの輸入、販売	現存
2024	台湾明治医薬股份有限公司	子会社	医療用医薬品の販売	現存
2025	メイジ・フード・アジアパシフィック(シンガポール)	子会社	アジア・パシフィックエリア内の子会社の経営管理、ガバナンス機能強化など	現存
2025	メイジ・ファルマ・アジア(シンガポール)	子会社	医薬品・ワクチンの販売など	現存

New Global Action

——新たなアプローチで、グローバルにチャレンジした10年——

「今までの手法に縛られない切り口で
アジア、欧州、米国へ」

「歴史と技術があるから大胆になれる
そこに新しい明治らしさ」

①「明治ほほえみらくらくキューブ」の技術で 欧州市場に展開

「子どもが赤ちゃんのときに欲しかったわ。スプーンで何杯入れたかわからなくなって、何回も作り直したのよ！」世界初※のキューブタイプの粉ミルクを手にした英国人が思わず声をあげた。こうして現地で驚きをもって迎えられたのが、「明治ほほえみらくらくキューブ」の製造技術を活用して生まれた「Aptamil」だ。

ダノン社ブランドのキューブタイプ粉ミルク「Aptamil」は、2021年に両社の事業提携により誕生した商品である。計量不要で粉がこぼれないという独自価値は、利便性が高く、育児をサポートする商品として大きな反響を呼んだ。使いやすさを求める声は国境を越え、英国を足掛かりに、フランス、イタリア、エストニア、ラトビア、リトアニアへと販売網が広がる。明治グループの画期的な技術を他社ブランドで投入する新たなアプローチにより、欧州市場を切り開いていく。

※当社調べ(2007年10月時点)



②伸び盛りのベトナム市場、栄養改善事業で社会課題に向き合いながら成長を図る

ベトナムは高い出生率などを背景に市場が拡大し、乳幼児用粉ミルク事業とチョコレートなどのカカオ事業が成長を遂げていた。2021年4月、ハノイに現地法人「メイジ・フード・ベトナム」を設立し、日本からの粉ミルクの直販を開始。

ベトナムは女性の低栄養問題が大きな社会課題となっている。その解決に向けて2018年より、市販ルートで販売中の「ママミルク」の配合をベースとした栄養強化ミルク「メイライフ」を活用する栄養改善事業に取り組んだ。ハノイ医科大学とも連携し、明治の栄養士から栄養セミナーを受講し栄養強化ミルクを飲んだ女性労働者の健康状態や職場における生産性の向上の変化について検証(2025年終了)。現地の社会課題解決に貢献しながら、ベトナムにおけるmeijiブランドのさらなるプレゼンス向上とともに、粉ミルクの売上拡大に邁進している。



③「ベルモスジル」を契機とした台湾進出とアジア展開への挑戦

アジアで5番目の規模、1人当たり医薬品市場で3番目の台湾に参入の機会をうかがう中、2024年3月、日本で造血幹細胞移植後に起こる合併症、慢性GVHDの治療薬「ベルモスジルメシル酸塩錠」の製造販売承認を取得したことを受け、台湾でも薬事承認を取得。同年12月、台湾明治医薬股份有限公司を設立した。慢性GVHDの治療では、ステロイド剤などが一次治療として用いられてきたが、十分な効果が得られない患者さんも多い。こうした中、「ベルモスジルメシル酸塩錠」が新たな治療選択肢として加わることで、医療現場からのニーズに応えることが可能となった。

台湾では、造血幹細胞移植を実施する医療機関の約7割が、台湾明治医薬のオフィスを構える台北市周辺に集中しているため、医療機関への迅速かつ安定的な供給体制を実現。

「ベルモスジルメシル酸塩錠」はすでにタイ、インドネシアでも販売を開始しており、Meiji Seika ファルマの事業は着実にアジアへと広がっている。

今後も医薬品へのアクセス向上を図り、アンメット・メディカルニーズの解消に貢献し、アジアにおけるプレゼンスのさらなる向上を目指していく。



⑤アジア基盤の構築期間を経て、グローバル研究開発型企業への躍進を目指す

明治グループの医薬品事業は、タイやインドネシア等のアジアでの生産販売の基盤構築の次段階として、創業基盤を先進国へ求め、グローバル研究開発型企業への躍進を目指している。メイジ・ファルマUSAは、スタートアップやハーバード大学、マサチューセッツ工科大学などのアカデミアが集まっているボストンにオフィスをかまえ、最先端研究から明治グループのブロックバスター創出につながる案件を探している。

現地のネットワークづくりに力を注ぎ、2025年、革新的な新技術を開発するバイオテック企業への投資に多くの実績をもつベンチャーキャピタル「MPM BioImpact」に出資した。また、ヒト免疫グロブリン製剤の次世代製造技術の研究開発を行うスタートアップ「Lyric Bio」に出資。さらに、2026年にはユニバーサルインフルエンザワクチンを研究開発している「Centivax」に出資し、現地の投資会社やスタートアップとの協業がアクティブに進行中。

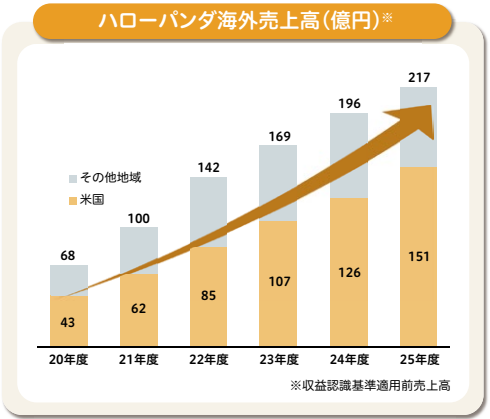
④発売から39年、「ハローパンダ」は今や世界中で愛されるグローバルブランドに

上野動物園でパンダのトントンが誕生した翌年の1987年、「こんにちはパンダ」として日本で発売されるも、やがて姿を消し、シンガポールで再チャレンジ。ビスケットの中にチョコクリームを充填し、そのサクサク感とプリントされたパンダのかわいらしさで、今や30以上の国や地域で愛されている。つまんでも手が汚れないことや、パンダのイラストが国によって異なったり、ハラル認証を取得するなど、世界の多様な気候や文化に合わせた展開を行っている。

そしてアメリカでは、チョコスナックのカテゴリーは珍しく、当初、「どの棚に置けばいいのかわからない」と小売店やバイヤーに言われ、展示会でも居場所がない事態に。営業担当者は試食用のサンプルを抱えて小売店を回った。小袋にしたり、フックにかけられる穴をあけたりと改善を重ねた。転機が訪れたのは2017年、パウチ包装の採用でヒット！さまざまなスポーツをするパンダのイラストと車での移動にピッタリなのも人気の理由。さらにコストコのクーポン冊子「MVM」に掲載されて全米が認知。アメリカにおいては、2021年度からの5年間で売り上げは約3倍に拡大。2025年度には年間売上151億円に成長した。



世界各国で発売されている「ハローパンダ」のパッケージ
左から、アメリカ、インドネシア、シンガポール、中国



栄養報国の精神のもと築いてきた 110年の歴史を礎に、 次の時代に向けて価値を創り続ける 明治グループへ



明治グループは、2026年に創業110年、現体制になって15年という大きな節目を迎えました。お客さま、株主・ビジネスパートナーの皆さま、そして歩みを支えてきた社員の皆さま一人一人に、心より感謝申し上げます。

これまで明治グループは、「栄養報国」の精神のもと社会課題に向き合いながら事業活動を続けてきました。菓子・乳製品・医薬品へと領域を拡大し、「食」と「薬」の両輪で人々の健康に貢献する企業グループへと発展しています。

一方、世界を取り巻く環境は大きく変化してきました。近年は、コロナ禍により人々の暮らしや社会の価値観が大きく変化し、さらにサステナビリティの考えが浸透するなど、企業には社会課題の解決と事業を一体で進めることが求められています。

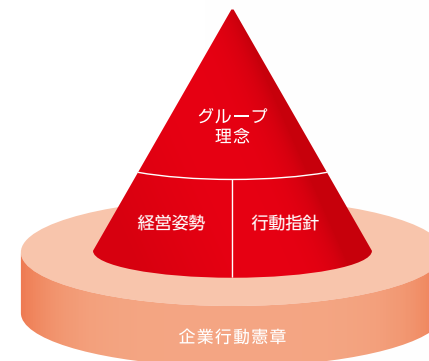
私たち明治グループは、これまでの110年間、チャレンジ精神をもち誠実に社会課題に向き合ってきました。この積み重ねが、世代を超えた信頼を築いてこられたのだと思います。今後、明治グループがさらなる成長を続けていくためには、これまで培ってきた技術や知見を活かしながら、社員一人一人が「変える」の主演として自ら考え、そして行動することが不可欠です。それぞれが持ち場で課題と向き合い、価値を創り続けることが次の時代の明治グループを形づくりま

す。これから先の100年も、社会に貢献しながら持続的に発展していくためには、事業を通じた価値創造をさらに進化させていくことが重要です。「食と健康のプロフェッショナル」として人々の健康に貢献するとともに、「人・社会・地球のすべてが健康であるより良い未来」の実現を目指していきます。

110年の歩みを礎に、次の未来を、共に切り拓いていきましょう。

明治ホールディングス株式会社

代表取締役社長 CEO 松田 克也



グループ理念

私たちの使命は、「おいしさ・楽しさ」の世界を拡げ、
「健康・安心」への期待に応えてゆくこと。
私たちの願いは、「お客さまの気持ち」に寄り添い、
日々の「生活充実」に貢献すること。
私たち明治グループは、「食と健康」のプロフェッショナルとして、
常に一歩先を行く価値を創り続けます。

経営姿勢

5つの基本

- 1 「お客さま起点」の発想と行動に徹する。
- 2 「高品質で、安全・安心な商品」を提供する。
- 3 「新たな価値創造」に挑戦し続ける。
- 4 「組織・個人の活力と能力」を高め、伸ばす。
- 5 「透明・健全で、社会から信頼される企業」になる。

行動指針

meiji way

お客さまの、パートナーの、仲間たちの、
「そばになくてはならない存在」であるために

- 1 お客さまと向き合って、お客さまから学ぶ。
- 2 先を見る動を鍛え、先駆ける技を磨く。
- 3 仕事をおもしろくする、おもしろい仕事を創る。
- 4 課題から逃げない、やりぬく気概と勇気を持つ。
- 5 チームの可能性を信じ、チームの力を活かす。

企業行動憲章

私たち明治グループは、「食と健康」に関わる事業に携わる者として、その責任の重さを自覚しながら、企業として健全に発展していくことで、社会への責務を継続的に果たしていきます。そのために、役員および従業員は、諸法令、国際的取り決め、社会規範、およびグループ各社の定める諸規程などを遵守し、高い倫理観のもと、公正かつ誠実に行動します。

お客さまとともに

- 1 私たちは、高品質で安全な製品・サービスや適切な情報の提供を通じて、お客さまの信頼と満足の獲得に努めます。

従業員とともに

- 2 私たちは、従業員の多様性や人格・個性を尊重するとともに、安全で働きやすい職場環境を整備し、コミュニケーションを重視した創造的で活力ある組織づくりに努めます。

取引先とともに

- 3 私たちは、公正・透明・自由な競争ならびに適正な取引を行い、市場における相互信頼関係を構築します。

株主・投資家の皆さまとともに

- 4 私たちは、持続的な成長と中長期的な企業価値の向上を図るために、適切なガバナンス体制を整備し、運営するとともに、株主・投資家の皆さまと建設的な対話を行い、適時・適切な情報開示を行います。

地球環境とともに

- 5 私たちは、グループの事業が自然の恵みの上に成り立っていることを十分に認識し、資源を守り地球環境との調和を図ることで、持続可能な社会づくりに努めます。

社会の一員として

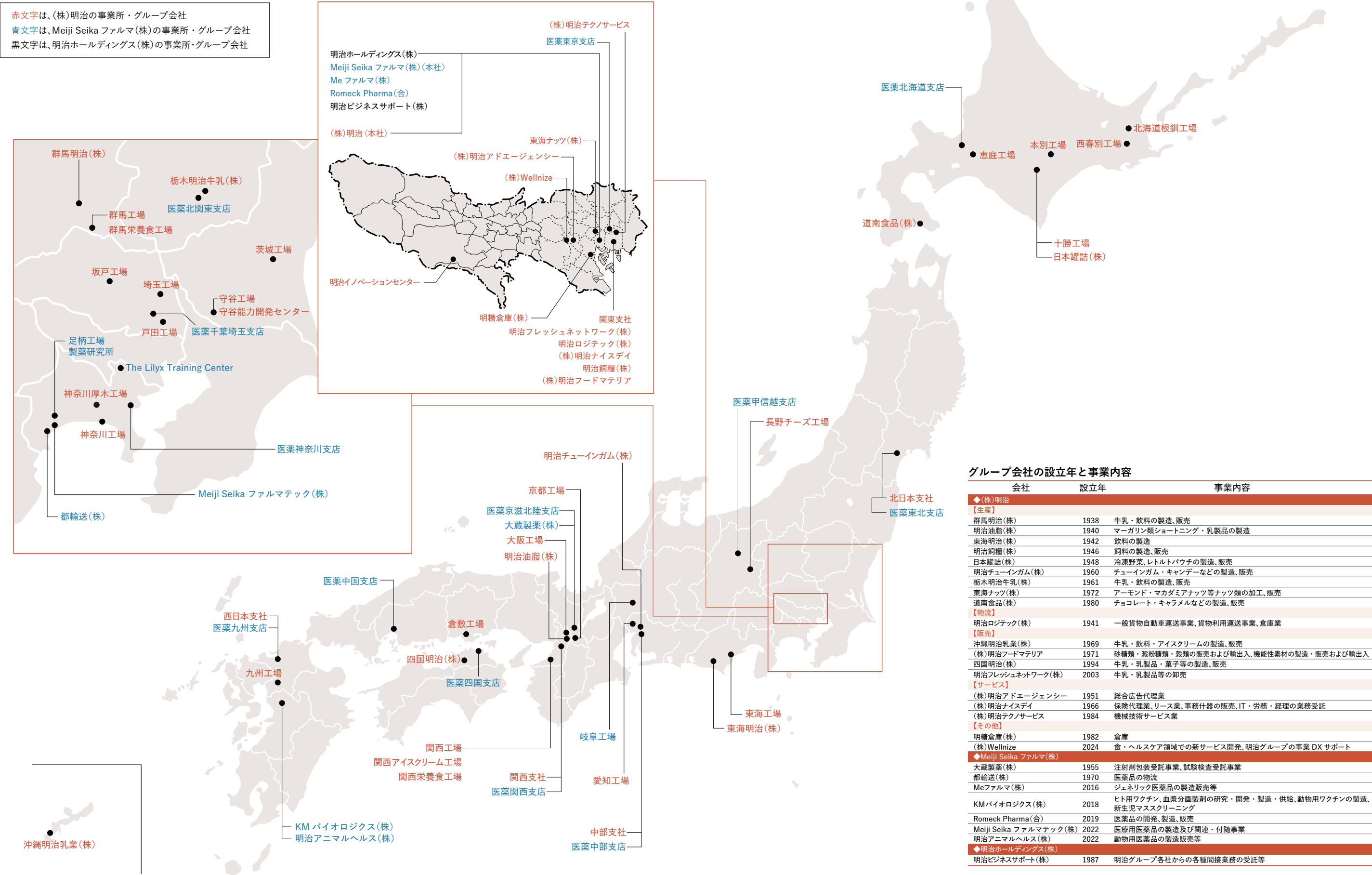
- 6 私たちは、企業活動にあたって以下の行動をとり、社会への責任を果たします。

- 1 企業活動に関わるすべての人々の人権尊重に努めます。
- 2 各国・地域の法令遵守はもとより文化・慣習を尊重し、企業活動を行います。
- 3 良き企業市民として、地域社会との交流を深め、広く社会貢献に努めます。
- 4 お客さまなどに関する個人情報の厳正な管理を行います。
- 5 知的財産権の重要性を理解し、この保護に努めるとともに、不当な侵害・使用の排除を徹底します。
- 6 社会的な腐敗につながる不正行為には関与しません。
- 7 政治・行政との健全かつ正常な関係を保ちます。
- 8 市民社会の秩序や安全に脅威を与える反社会的な団体・個人に対しては、断固たる態度で臨みます。

私たちは、この憲章の精神を理解し、グループ内に広く周知徹底して、その実現に努めます。万一この憲章に反する事態が発生した場合には、自らの責任でその解決に取り組み、原因究明・再発防止に努めるとともに、自らを含めて厳正な処分を行います。

国内事業所・グループ会社一覧

*グループ会社は本社所在地を記載
*2026年9月1日時点



グループ会社の設立年と事業内容

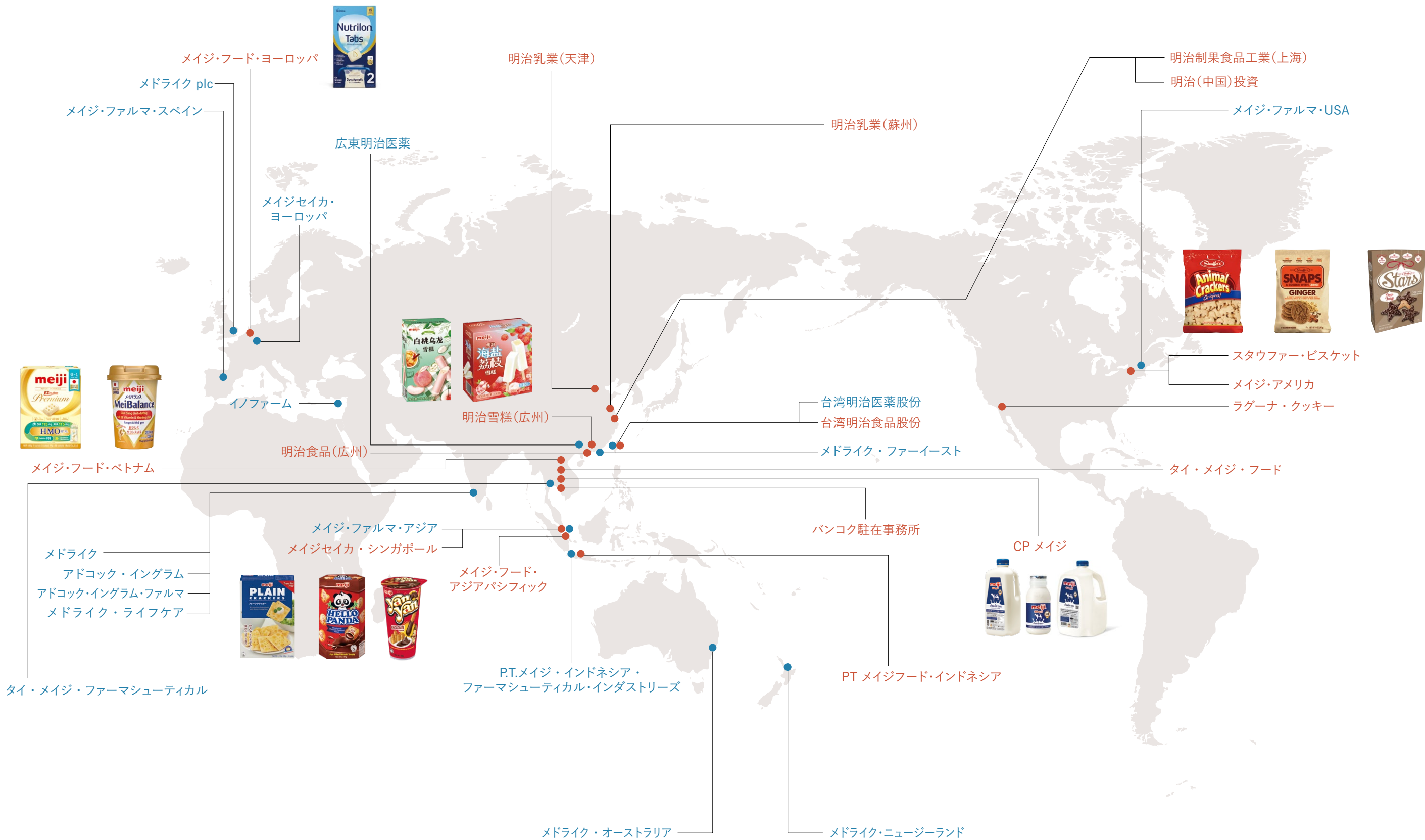
会社	設立年	事業内容
◆(株)明治		
【生産】		
群馬明治(株)	1938	牛乳・飲料の製造、販売
明治油脂(株)	1940	マーガリン類ショートニング・乳製品の製造
東海明治(株)	1942	飲料の製造
明治飼糧(株)	1946	飼料の製造、販売
日本罐詰(株)	1948	冷凍野菜、レトルトパウチの製造、販売
明治チューインガム(株)	1960	チューインガム・キャンデーなどの製造、販売
栃木明治牛乳(株)	1961	牛乳・飲料の製造、販売
東海ナッツ(株)	1972	アーモンド・マカダミアナッツ等ナッツ類の加工、販売
道南食品(株)	1980	チョコレート・キャラメルなどの製造、販売
【物流】		
明治ロジテック(株)	1941	一般貨物自動車運送事業、貨物利用運送事業、倉庫業
【販売】		
沖縄明治乳業(株)	1969	牛乳・飲料・アイスクリームの製造、販売
(株)明治フードマテリア	1971	砂糖類・澱粉糖類・穀類の販売および輸出入、機能性素材の製造・販売および輸出入
四国明治(株)	1994	牛乳・乳製品・菓子等の製造、販売
明治フレッシュネットワーク(株)	2003	牛乳・乳製品等の卸売
【サービス】		
(株)明治アドエージェンシー	1951	総合広告代理業
(株)明治ナイスデイ	1966	保険代理業、リース業、事務什器の販売、IT・労務・経理の業務受託
(株)明治テクノサービス	1984	機械技術サービス業
【その他】		
明糖倉庫(株)	1982	倉庫
(株)Wellnize	2024	食・ヘルスケア領域での新サービス開発、明治グループの事業 DX サポート
◆Meiji Seika ファルマ(株)		
大蔵製薬(株)	1955	注射剤包装受託事業、試験検査受託事業
都輸送(株)	1970	医薬品の物流
Meファルマ(株)	2016	ジェネリック医薬品の製造販売等
KM バイオロジクス(株)	2018	ヒト用ワクチン、血漿分画製剤の研究・開発・製造・供給、動物用ワクチンの製造、新生児マスクリーニング
Romeck Pharma(合)	2019	医薬品の開発、製造、販売
Meiji Seika ファルマテック(株)	2022	医療用医薬品の製造及び関連・付随事業
明治アニマルヘルス(株)	2022	動物用医薬品の製造販売等
◆明治ホールディングス(株)		
明治ビジネスサポート(株)	1987	明治グループ各社からの各種間接業務の受託等

海外事業所・グループ会社一覧

*2026年9月1日時点

- 赤文字は、(株)明治の事業所・グループ会社一覧

● 青文字は、Meiji Seika ファルマ(株)の事業所・グループ会社一覧



ビジュアルで振り返る110年 1916 - 2026

2026 (令和8) 年8月発行		
発行	明治ホールディングス株式会社	
東京都中央区京橋 2 丁目 4 番 16 号		
企画	明治グループ110周年社史編纂事務局	
印刷・製本	大日本印刷株式会社	

明治グループ